



富山市の遺跡物語



富山城ツアー～石垣と曲輪をめぐる～

埋蔵文化財センターと郷土博物館の学芸員が案内役となって、富山城をめぐるツアーを開催しています。

平成 21 年度に、石垣にスポットをあてた「富山城石垣ツアー」を始めましたが、今年度からは石垣だけでなく、発掘調査の成果や曲輪に存在した施設等も紹介するツアーにページショアップ。計 4 回開催し、毎回内容を変えて何回も来ていただけるよう工夫しました。延べ 350 名の方が参加され、「知らないことがたくさんあった」とたいへん好評でした。

現在、城址公園は整備工事により新しく生まれ変わろうとしています。こうしたイベントも富山城の魅力を高めていく大切な活動にしたいと思います。

史跡王塚・千坊山遺跡群公有化事業

史跡王塚・千坊山遺跡群は、羽根・富崎丘陵に分布し、弥生時代後期末から古墳時代前期（約1,800年から1,700年前）の遺跡7ヶ所で構成されています。平成17年3月に、史跡王塚古墳（昭和23年指定）に関連する遺跡6ヶ所が追加指定され、現在の指定名称となりました。

史跡には、弥生集落のほか、日本海沿岸交流を物語る山陰系の四隅突出型墳丘墓、前方後方墳への過渡期の墳丘形態を示す前方後方形墳丘墓、越中を代表する大型前方後方墳、17基からなる大規模な古墳群などの多彩な墳墓があります。

史跡公有化事業に着手しました！

平成19年度に策定した「史跡王塚・千坊山遺跡群保存管理計画策定報告書」に基づき平成23年度より、史跡指定地の公有化に着手しました。

初年度の平成23年度は、千坊山遺跡と六治古墳墳墓において、崩落の可能性があるなど緊急性の高い場所の購入を行いました。公有化面積は2,483.29m²です。

公有化事業は、今後、数カ年かけて進めていく予定です。



史跡王塚・千坊山遺跡群の分布



【23年度公有化箇所】

千坊山遺跡(中央)と奥羽丘陵(後方)

遺跡名	公有化面積	筆数	地権者
千坊山遺跡	1,067 m ²	12筆	7名
六治古墳墳墓	1,416.29 m ²	6筆	
合計	2,483.29 m ²	18筆	

【全体計画】

遺跡名	公有化予定面積	筆数	地権者数
千坊山遺跡、勅使塚古墳、六治古墳墳墓、向野塚墳墓、富崎塚古墳群、富崎千里古墳群	60,005.66 m ²	247筆	90名

ホームページに史跡王塚・千坊山遺跡群のコーナーを開設しました！

史跡王塚・千坊山遺跡群の概要を、図や写真で紹介しています。また、ガイドマップをダウンロードすることもでき、史跡めぐりにご活用いただけます。

<http://homepage2.nifty.com/kitadai/ouduka-sennbouyama/top/top.htm>

北代縄文広場この1年—2011年度—

北代縄文広場の管理運営は長岡地区自治振興会に委託しています。広場や史跡北代遺跡の説明、縄文土器づくりや火起こしなど体験学習のお手伝いは北代縄文広場ボランティアの会が行っています。

平成23年度は、北代縄文サマーフェスタや長岡地区自治振興会の恒例行事「縄文冬まつり」等、多くの行事が開催され、地区住民の交流に活用されました。また、昨年度から進めていた復元竪穴住居1棟の修理工事が完成しました。この他、中学2年生が学校外で就業体験等の活動を行う「社会に学ぶ 14歳の挑戦」として、吳羽中学校4名、奥田中学校2名、西部中学校3名、三成中学校1名を受け入れました。平成23年4月から平成24年2月末までの来場者は8,015人です。

第62回北日本新聞地域社会賞を受賞しました！

平成23年11月2日

北代縄文広場ボランティアの会は、平成11年の広場オーブン時に結成されました。これまで、9割を超える来場者の方々に広場の説明等を行ってきました。長年にわたるこれらの活動を通して歴史文化の発信と地域活性化に貢献したことが認められ、北日本新聞地域社会賞を受賞しました。

長い伝統をもつ本賞の受賞を励みに、ボランティアやスタッフ一同、さらに研鑽を重ね、皆さまに楽しく学んでいただけるよう今後も努めてまいります。

復元竪穴住居1棟の修理工事が完成しました！



受賞したボランティアの会

発掘調査や古建築の研究成果に基づき、広場には縄文時代の竪穴住居が5棟、高床倉庫が1棟、それぞれ実物大で復元されています。老朽化した土屋根竪穴住居1棟について、昨年度に土屋根の解体と屋根材(クリ丸太材等)を調達および加工し、今年度に土屋根を復元しました。建築・木材・土壤・菌等の専門家から指導・助言を得ながら修理を進め、各所に長寿命化の対策を講じました。平成11年のオーブン以来、屋内の炉で火を焚いてきたことで、屋根材は煤けましたが、虫の食害などが認められない材もありました。強度が保たれている材は、今回の復元修理でも再利用し、オーブン時のクリ丸太材の約2割を再利用しました。



復元した土屋根竪穴住居内部
(黒く煤けた材が再利用材)

北代縄文サマーフェスタを開催しました！

平成23年8月21日

縄文土器づくり、縄文グッズづくり、縄文土器の野焼き、ミニ企画展「小竹貝塚一貝で裝うー」の解説、復元工事中の竪穴住居公開、「パパレジエーナ」の演奏など多彩な催しからなるサマーフェスタを開催しました。真っ赤な夕焼けのなか、土屋根住居をバックにした幻想的な演奏(アンデス民謡・アフリカの歌)に参加者は皆、時が過ぎるものも忘れて聞き入っていました。雨模様のなか、子どもたちも多く参加し、楽しい夏休みのひとときを過ごしました。



ライブの様子

安田城跡歴史の広場この1年—2011年度—

平成23年4月から平成24年2月末までに11,517人の来場者の方々にお越しいただきました。団体利用いただいた方々は58団体3,825人に及び、そのなかには市内の小学校をはじめとする学習活動だけではなく、福祉関係の方々の憩いの場としても広く活用されています。豊かな景観が来場者の方々の心を癒し、戦国時代に思いを馳せることができることも好まれているようです。

春から夏には、水堀で色とりどりに咲く睡蓮や飛来する野鳥の撮影・写生スポットとしても利用されています。来場者の方々が思い思いに制作された作品の一部は、安田城跡資料館で展示されています。これらは、睡蓮が咲き終えた秋から冬に来場される方々の楽しみの一つとなっています。

広場は、地元行事の会場としても多く利用されています。4月には獅子舞が奉納され、8月には「第19回 安田城月見の宴」などが催され、賑わいました。

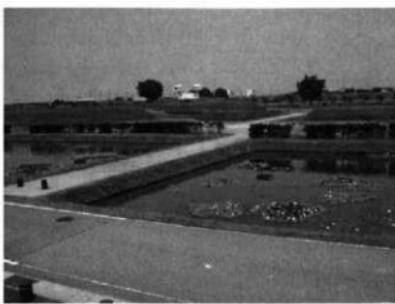
「社会に学ぶ 14歳の挑戦」

平成23年7月6日

埋蔵文化財センターが受け入れた西部中学校2年生3名と三成中学校2年生1名が、広場の管理運営業務を体験しました。博物館などで研究や展示を行う学芸員になりたいという明確な目標を持った生徒もおり、みんな真剣に取り組んでいました。

展示内容を学習した後、来場者の方々に心をこめて説明しました。気持ち良く見学できるように、資料館の展示ケースや窓なども丁寧に掃除しました。

広場駐車場周囲の除草や倉庫内の片付けなど、裏方の仕事も体験し、苦しいことも我慢強くやり遂げることで達成感を得たようです。他校の生徒とも積極的に交流・協力し、力をあわせて仕事に取り組む大切さを学び取ったことが感想文からうかがえました。



水堀に映える睡蓮



力を合わせて倉庫内を片付ける中学生

地元ケーブルテレビ局の特集番組で紹介されました！

平成23年10月8日～21日

婦中・山田地域で話題のスポットを紹介する情報番組で、特集されました。「婦中町朝日地区で学ぶ」がテーマのコーナーで、安田城や城主の岡嶋一吉、豊臣秀吉の越中攻めの概要をはじめとして、試掘調査から保存、そして国史跡指定・広場整備までの経緯などが紹介されました。

昨今の歴史ブームのなか、広場には市民の皆さんをはじめとして、県内外からお城のファンも多くお越しいただいています。番組をご覧いただいた市民の皆さんにも、多数ご来場いただきました。

調査概要報告 1 古墳時代後期の円墳がまるごと見つかる！

二本榎遺跡

1. 二本榎遺跡のあらまし

この遺跡は呉羽丘陵の南西側、平野部から一段高くなる下位丘上（標高 59～61m）に立地しています。昭和 26 年刊行の森秀雄著『大昔の富山県』所収の「富山縣石器時代遺跡地名表」には既に登載されており、県内の研究者の間では古くから知られています。

周辺には旧石器～近世までの遺跡が確認され、県内でも遺跡が密集する地域です。遺跡の北東 300m には小長沢古墳群があり、現存するのは 3 号墳のみです。3 号墳では須恵器が表探されています。遺跡の西には、平岡窯・二本榎 III 遺跡があり、7 世紀末の須恵器が表探されています。

遺跡の南西丘陵上には弥生時代終末期の集落や四隅突出型墳丘墓、県内有数の規模の前方後方墳など 7 遺跡で構成された国史跡王塚・千坊山遺跡群が所在します。

2. 確認調査のあらまし

今回の調査は主要地方道小杉婦中線改良工事に先立って、遺跡の性格を見極めるのに詳細なデータを取るための確認調査です。その結果、富山県内では類例の少ない古墳時代後期（1,400 年前）の横穴式石室をもつ古墳 1 基、溝、土坑などが見つかりました。

3. 古墳

古墳は、調査区の中央部西寄りで見つかりました。直径 14m の円墳で、古墳の中央部に棺を安置した横穴式石室、古墳の周りをめぐる溝（周溝）があります。後世の開墾等で墳丘と石室上部は失われていました。

墳丘の規模は長径 10.4m、短径 10.2m で、ほぼ真ん円の形をしています。墳丘盛土は地山から 10cm 程度残存し、墳丘東側では周溝の一部を埋め戻してかたちを整えています。土の盛り方は、墳丘の大半が失われているため、よくわかりません。

横穴式石室は、左片袖式といわれるもので、下から 2 段まで石組みが残っています。

古墳の中央部から南側の周溝に向けて竪穴が掘られ、その後石を積み上げて石室をつくっています。石室の規模は竪穴が全長 7.3m、最大幅 2.0m、深さ 0.3m、玄室（死者の棺を安置する墓室）部分で長さ 3.7m、幅 1.2m、羨道（外と墓室との通路）部分で残存する長さ 2.0m、幅 0.7m です。石室の主軸は西へ 30° 傾いています。玄室と羨道に間には石が置かれています。床面は粘土をたきしめた貼床になっています。天井石は失われており、石室の一部は壊されています。

出土遺物には、ガラス玉、刀子、須恵器壺か横瓶の破片が 1 点見つかっています。

周溝は墳丘を全周しています。幅 1.2～2.4m、深さ 0.2～0.4m です。石室の入口である南側が丁寧につくられています。

遺物は周溝南半分の埋土下層から多く出土しました。出土した遺物は須恵器壺・壺・高杯・壺・蓋があります。



二本榎道路遠景（南西から）



横穴式石室古墳（西から）

石室に遺体を納め、溝のまわりで死者を弔う祭祀をした後、溝に廃棄されたと考えられます。出土した須恵器の年代は7世紀初頭です。

古墳周溝から幅0.6~0.7m、深さ0.4mの溝が、東西方向に伸びています。この溝は古墳周溝より後に掘られており、古墳周溝と交わる部分で須恵器の壺が出土しています。壺の年代は7世紀初頭で古墳周溝から出土した須恵器とほぼ同じ時期です。

このほか、土坑や穴が見つかっていますが、遺物は出土しておらず時期や目的など詳細は不明です。遺物は須恵器のほか縄文土器や縄文時代の石器が出土しています。

4. 古墳周辺出土の須恵器提瓶

古墳の周辺では、過去に耕作の際に大きな石をずらしたところ、完全な形をした須恵器の提瓶が4点出土しました。

今回の調査で出土した須恵器とほぼ同じ年代であり、副葬品として納められていた可能性があります。

5.まとめ

今回の確認調査では、古墳時代後期の横穴式石室をもつ古墳が1基見つかりました。横穴式石室をもつ古墳は、富山県内では現在までに6基確認されています。今回の調査で見つかった古墳は県内で7基目となります。

また、古墳の規模や形態、横穴式石室の構造や規模、土器の年代や供獻された状況など、この時期の古墳の全貌が確認されたのは県内では初めてです。この時期の古墳を研究する上で、大変貴重な調査成果です。

この時期は複数の古墳が集まる群集墳が多く、それらは、有力な家族の家長が葬られた世帯墓です。やや離れた北東300mにある小長沢古墳群3号墳などの関係も、今後調査・研究を進める必要があります。

遺跡周辺は、弥生時代終末期～古墳時代前期にかけて、国史跡王塚・千坊山遺跡群など富山県内でも有数の首長墓が築かれました。しかし、その後の様相は不明でした。

今回、この古墳が見つかったことにより、王塚・千坊山遺跡群が営まれた後の旧婦負郡の有力者の動きを解明する大きな手がかりになります。

二本榎遺跡の古墳は、現在見ることができる県内唯一の横穴式石室古墳であり、史跡王塚・千坊山遺跡群の前期古墳と合わせ後期古墳までを学習できる地域の宝といえます。（細辻嘉門）



高环出土状況（北から）



壺出土状況（東から）



古墳周辺出土の壺

1. 館本郷II遺跡のあらまし

今年度も昨年度に引き続き遺跡の南端で発掘調査を行い、弥生時代終末期から近世まで断続的に続く集落が見つかりました。

2. 弥生時代～古墳時代

調査区中央北寄りで弥生時代終末期(1,800年前)・古墳時代中期(1,500年前)の遺構が見つかりました。弥生時代の遺構は、過去の発掘調査で見つかっている遺構・遺物と同じ時期の遺構が見つかりました。弥生の集落が遺跡範囲の南端まで広がることがわかりました。

古墳時代中期の土坑1基は楕円形で、土師器の高壺が出土しました。この時期の遺構は、境野新道跡や八町II遺跡で見つかっていますが、あまり多くはなく、婦中・八尾地域で見つかったのは初めてです。また、遺物のみですが、古墳時代後期の須恵器も出土しました。

この遺跡では、史跡王塚・千坊山遺跡群と同時期に遺跡の最盛期を迎えたとされましたが、今回の調査では古墳時代全般にわたって、人々が生活していたことがわかりました。

3. 奈良・平安時代

この調査区での中心となる時期です。見つかった遺構には、掘立柱建物2棟・土坑・ピットがあり、調査区の西側に集中します。調査区の西側には旧河川と思われる地形の落ち込みがあります。

見つかった掘立柱建物は、3間×4間で両側に廂が付く総柱建物です。建物の棟の方位はほぼ南北です。

建物の梁の間が2間で廂を持つこと、柱穴の通りがしっかりとすること、方位が南北に忠実であることから、高い建築技術で建てられており、規格に則った建物であり、

役所などの公的な建物と考えられます。なお、建物の柱穴から採集した炭化物を年代測定したところ、9世紀後半(1,200年前)～10世紀前半(1,100年前)の年代が得られました。

1間四方の掘立柱建物も見つかりました。建物の性格は、柱穴の大きさや深さから推測できる柱の太さ、長さからみて、高さの低い簡易な建物（作業小屋・倉庫）が考えられます。

この遺跡ではこれまでの調査で8世紀(1,300年前)～7世紀(1,400年前)の遺構が見つかっています。今回の調査では後続する年代の遺構が見つかり、集落が続くことがわかりました。

4. 中世～近世

この時期の遺構には溝があります。溝は調査区東を南から北にほぼ直線に流れ、遺構の北端では狭く浅くなり途切れます。断面を観察すると2層に分けられます。下層からは全く遺物が出土していないため、溝が作られた時期はわかりませんが、上層に中世から近世まで様々な時期の遺物が出土しており、中世～近世の長い期間溝として機能していたと考えられます。

5. 各時代の遺構の分布

この遺跡では、弥生時代は遺跡範囲の北側が遺構・遺物とも密度が高くなっています。

古代になると、8世紀代は弥生時代の遺構分布と重複しますが、9～10世紀になると遺跡の中央や南側にも遺構・遺物が増え、中世以降は、遺跡の中央や南で密度が高くなります。

この2カ年の発掘調査によって、高善寺地区に広がる弥生～近世まで断続的に営まれた集落の様相の一端を明らかにすことができました。

(細辻嘉門)



掘立柱建物（南から）

調査概要報告3 古代の馬小屋か？

ひっくつかすみよし
百尋住吉D遺跡

1. 調査のあらまし

この遺跡は呉羽丘陵の北端、旧神通川の河岸段丘上に位置し、西は射水平野の東端部を望むことができます。

基幹農道整備事業に伴い、493 m²の発掘調査を実施しました。飛鳥時代から平安時代にかけての掘立柱建物や柵列、溝、土坑、壠など多数の遺構がみつかりました。出土した遺物には飛鳥時代の製塩土器・須恵器や奈良～平安時代の土師器・須恵器があります。



調査区全景（上が北）

2. 遺構の移り変わり

飛鳥時代～奈良時代前期（約1,300年前）には堅穴住居（6.1m×5.9m）や土坑が築かれ、この頃に集落が形成され始めたとみられます。

奈良時代後期から平安時代前期（8世紀後半から9世紀）には掘立柱建物や大型土坑、柵列、壠、溝などが東西方向に整然と並ぶ集落となります。掘立柱建物はまず3間×2間の柱間をもつ南北に長い建物が建てられた後、同じ場所に2間×4間の柱間をもつ東西に長い建物に建て替えられました。東西の建物が建っていた時期と同じ時期にその東側に長さ5.3m、幅2m、深さ0.35m～0.85mを測る長方形の大型土坑が2つ並んでみつかりました。そのうち1つの土坑には2間分の柵列が伴っていました。さらに東側に南北方向の細長い溝跡が検出され、壠に伴う遺構とみられます。

そのさらに東側には南北3間分の柱列が発掘され、ここにも1棟掘立柱建物が建っていたようです。

3. 大型土坑は馬小屋か？

調査区内で見つかった2つの大型土坑はその大きさから馬小屋や貯蔵穴、水ためなどの用途が考えられます。

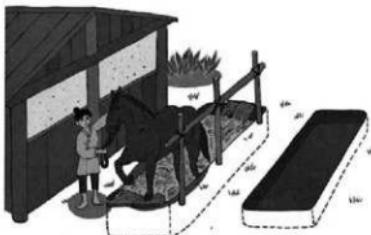
また、昨年度の発掘調査区からは、大型哺乳類の骨が出土していました。当時の大型哺乳類としては牛か馬が考えられます。

一方、この土坑の底の土を分析した所、イネ科の植物やクマザサ、馬の糞となりそうな草花の花粉がみつかりました。

これらのことから、大型土坑は馬小屋として利用されていた可能性が高くなりました。

また、穴に稻わらを敷いて馬に踏ませ、肥料を作っていた民俗事例もあり、調査で見つかった穴も同様に堆肥の作成が行われていた可能性があります。

遺跡は古代射水郡寒江郷の東端に位置する集落です。旧神通川の河岸段丘上に位置し、対岸は新川郡です。馬は農耕以外に、人や物資を運んでいたのかも知れません。（鹿島昌也）



馬小屋のイメージ図

調査概要報告 4 吳羽丘陵西麓の古代土器生産体制

にしあやや・にしあやかまひと
西金屋・西金屋窯跡

1. 西金屋・西金屋窯跡のあらまし

この遺跡は、富山市古沢地内に所在し、呉羽山丘陵西麓の低い尾根に立地する奈良時代～平安時代の集落跡・窯跡です。遺跡南端には、奈良時代（約1,250年前）に操業された須恵器窯が確認されています。遺跡の南にある六泉下池の岸辺には、ほぼ同時期の古沢窯跡群が操業されており、これらと一体となっています。

平成5年、市道拡幅工事に伴い調査を行い、須恵器窯1基と灰原、粘土採掘坑群を確認しました。須恵器窯は半地下式登窯形式の窯でした。後世の削平を受けているため、窯の一辺約3mが残存していました。灰原は上下二層に分かれ、下層は本窯跡のもので、上層は周辺にある別の窯跡のものと考えられます。

2. 呉羽丘陵西麓の古代土器生産体制

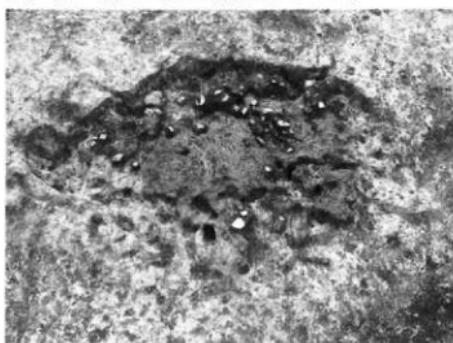
今回の発掘調査では、縄文時代の土器だまり、奈良時代の土師器焼成遺構3基、堅穴建物1棟、掘立柱建物2棟、土坑、柱穴などが見つかりました。

調査区西側に堅穴建物、掘立柱建物などの集落の遺構が広がっており、これらは生産に関わる工人の居住地と考えられます。

土師器焼成遺構は、調査区東側の緩斜面に集中して造られました。土師器焼成遺構から出土した炭化材の放射性炭素年代測定や遺構の考古学地磁気年代測定の結果、8世紀中頃～末頃の年代が得されました。本遺跡のある呉羽丘陵西麓地域を含む古代婦負郡域では、奈良時代の土師器焼成遺構は過去の調査で確認されておらず、今回の調査で初めて確認されました。



発掘調査区全景（東から）



土師器焼成遺構（東から）

「北陸地域における古代土器生産は、須恵器生産の窯場近くで土師器生産を行い、一体的な集約生産を確立することが特徴であり、8世紀中頃に『北陸型古代土器生産体制』が確立する（注1）」とされており、今回の調査結果により、須恵器窯場（古沢窯跡群・西金屋窯跡）近くで土師器生産を行う『北陸型古代土器生産体制』が、8世紀中頃～末頃に呉羽丘陵西麓地域に確立していたことが分かりました。

（堀内大介）

（注1）望月精司・鹿島昌也 2010「第3章 北陸の古代土器生産と窯・工房・工人集落」『古代窯業の基礎研究』新編社

調査概要報告5 「新川郡家」がおかれた遺跡

よむだいからく
米田大覚遺跡

1. 米田大覚遺跡のあらまし

米田大覚遺跡は富山市北部の米田町にあります。個人住宅の建築に先立ち発掘調査を行いました。

平成7・8年度には今回の調査区の北側と西側を大規模に発掘調査しています。整然と配置された平安時代（約1,150年前）の建物跡などが見つかり、「新川郡家」が置かれた遺跡と考えられるようになりました。平安時代の富山（越中国）は、礪波郡、射水郡、婦負郡、新川郡の4郡に分かれていますが、新川郡の中心となる役所が「新川郡家」です。

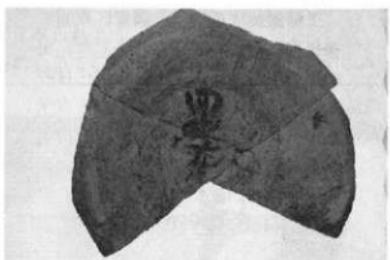


調査区の全景

2. 堀立柱建物と「正本」墨書土器

今回の調査では2棟の堀立柱建物が見つかりました。平成7・8調査で建物が集中して見つかった役所の中心部の北側に位置し、役所に関係した付帯施設と考えられます。

出土品で注目されるのは墨書土器と呼ばれる文字が書かれた土器です。本遺跡ではこれまでに200点以上の墨書土器が出土しています。文字を使いこなせる役人が働いていた「新川郡家」にふさわしい出土品といえます。今回の調査で「正本」と書かれた墨書土器が見つかりました。「正本」は、隣接する婦負郡の郷（当時の行政区画）と同じ名称です。墨書きがこの郷名のことを指しているのだとすれば、郡域を超えた人・物の移動やつながりがあったことを示します。拠点となる重要な遺跡であったことが推測でき、郡の中心的な役所であった「新川郡家」の可能性をより高める出土品といえます。



「正本」と書かれた墨書き

3. 岌跡について

調査区の全体に小さな溝が縦横に掘られていました。これは畠の耕作跡と考えられます。縦横になっているのは、地力が衰えないように方向を変えて畠を作ったためです。

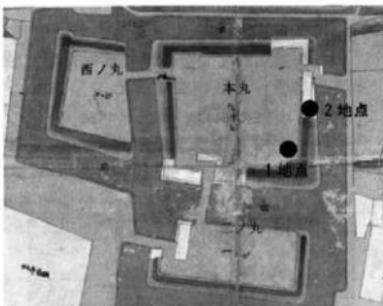
平成7・8年度の調査でも同じような溝が広がっており、広範囲に畠がつくられていたことがわかります。畠跡は堀立柱建物より少し後の時代のものと考えられます。郡家が存在しつつ、その裏手では耕作も行なっていた風景が想定されます。

（野垣好史）

1. 土壘とは？

城の周囲に廻らされた堤防状の土盛りを土壘と呼びます。堀や石垣とあわせて防御を担う施設です。古くは「土居」と呼ばされました。右絵図の本丸や二ノ丸などの曲輪の周囲にある色の濃い部分が土壘、白い部分が石垣です。ほとんどの土壘は明治以降に崩されたため、現在地上に残るのはごく一部です。

平成 23 年は右に示した 2 地点で発掘調査を行いました。



調査地点（「万治年間富山旧市街図」を一部改変）

2. 1 地点の調査

平成 23 年 3 月に行った本丸南東部の土壘上の調査です。現在、唯一地上に土壘が残っている部分です。

調査の結果、地表から約 15 cm 下に土壘の土が残っているのがわかりました。土は堀を掘ったときに出土した土を盛り上げたものと考えられます。土壘斜面の傾斜は約 40° であったことも確認できました。現在、土壘の斜面は模造石垣や玉石積みになっていますが、その内部には江戸時代の土壘の基本構造が良く残っていることがわかりました。



1 地点で確認した土壘(白線のように落ち込む)

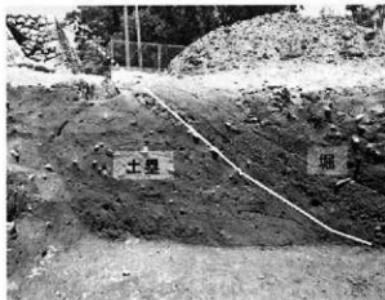
調査では土壘の上に廻っていた堀の跡を見つけることも目的としていました。しかし、明治から昭和に土壘の上部が削られていたため確認できませんでした。

3. 2 地点の調査

平成 23 年 6・7 月に行った本丸東部の土壘の調査です。地上に土壘は残っておらず、地下に土壘の下部が残存していました。

確認したのは南北に延びる土壘の東斜面です。堀に向かって落ち込む角度は、1 地点とほぼ同じ 40° です。土壘の断面は、粘土と礫混じりの土を交互に盛り重ねて崩れにくくしています。また、江戸時代を通じて何度も土を盛り直す補修を行っていることもわかりました。

土壘の中からは、江戸時代の陶磁器、瓦、砥石などが出土しました。（野垣好史）

2 地点で確認した土壘の断面
(白線が土壘の斜面を表す)

調査概要報告7 西ノ丸北西隅の水堀跡

1. 堀とは？

敵の侵入を防ぐために城の周囲に掘られた溝を堀といいます。土塁や石垣とあわせて防御を担う施設です。水の張られている堀を「水堀」、水の張られていない堀を「空堀」といいます。

富山城の堀は、本丸・二ノ丸・西ノ丸といった城の中心部を取り巻く「内堀」と、重臣の武家屋敷が建つ三ノ丸に廻らされた「外堀」の二重の水堀が廻っていました。水堀の水は、常願寺川から分流する小河川を通り、四ツ屋川などから流れ込み、神通川へ排出されました。

2. 西ノ丸北西隅の水堀跡

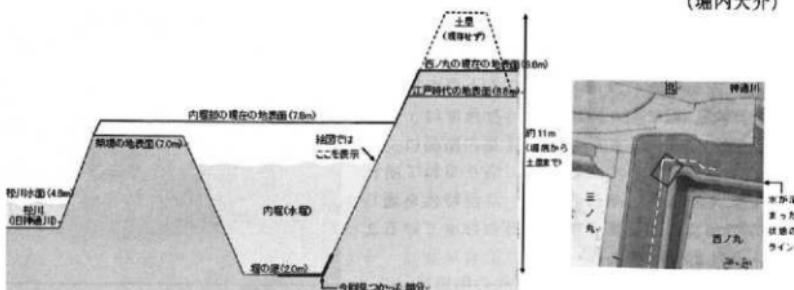
平成23年12月～平成24年1月に松川雨水貯留施設築造工事に伴う発掘調査を行い、初代富山藩主前田利次が寛文元(1661)年に改修した西ノ丸北西隅の水堀の堀底を検出しました。

堀跡は、現地表面から5.2m下(標高2.5m)で、東西4m、南北10mを検出しました。水堀の底面は水平で、箱堀の形態です。深さは、西側で50cm、北側で67cmです。堀底の標高は1.83～2.0mです。西ノ丸には、かつて高さ約4.0mの土塁が存在しており、水堀の堀底から土塁の頂部までは約11mの高低差であったと推定されます。

当時の堀の水位は不明ですが、現在の城址公園南側の堀の水位は標高6.9mですので、これよりわずかに低かったと考えられます。また、現在の松川(旧神通川)の水位は、七十二峰橋付近で平均水位標高4.8mであり、江戸時代の旧神通川の水位もこれに近いと推定されるので、水堀の水位が旧神通川の水位よりも少し高かったと言えます。

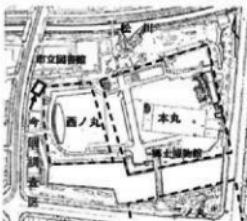
富山城において、水堀の構造を確認したのは今回が初めてです。堀底が確認されたことで、西ノ丸の西端がこれまでの復元よりも10m程西へ伸びることがわかりました。

(堀内大介)



水堀と松川(旧神通川)との関連模式図

「万治年間富山旧市街図」



調査区位置図



検出した堀跡(南東から)

調査概要報告 8 新たな竪穴建物を確認

1. 小竹貝塚のあらまし

この貝塚は、呉羽町北に所在する縄文時代前期（約6,000～5,500年前）の貝塚です。

平成20～22年度に新鐵治川改修工事に伴う調査を行いました。これまでの調査成果から、遺跡の全体構造が次のように推測できます。北西部から南部にかけて貝層が広がり、中央部には居住域の遺構が広がっています。南東部には木製品加工場・土器廃棄場として利用した谷があります。

貝層内で縄文時代前期として全国最多の70体を超える埋葬人骨が確認され、前期縄文人の集団の生物学的実像を復元できると期待されています。

2. 平成23年度の調査・整理

平成20～22年度に引き続き新鐵治川改修工事に伴う工事立会調査を行い、竪穴建物1棟・大型土坑・穴などの居住域の遺構を検出しました。縄文土器（前期）・磨製石斧・被熱線などが出土しました。

また、平成21・22年度に引き続き、緊急雇用創出事業交付金の交付を受けて、遺物の実測などの整理作業も行いました。



竪穴建物

調査概要報告 9 落城後の願海寺城跡

がんかいじじょうあと
願海寺城跡

1. 願海寺城跡のあらまし

この城跡は、富山市願海寺地内に所在する戦国時代の平城です。寺崎民部左衛門尉盛永とその子喜六郎が城主として居城し、天正9(1581)年に落城したと伝えられています。

平成14年度の調査では、二重に巡る堀や土橋、井戸などの遺構が見つかり、曲輪の存在が明らかになりました。平成16年度の調査では、方形区画の屋敷跡が見つかり、願海寺城の城下町が広がっていたと推測されました。

2. 平成23年度の調査

下水道工事に伴う調査で、戦国時代～江戸時代の堀、石組井戸、土坑などが見つかりました。遺物は、中世土師器・瀬戸美濃・伊万里・唐津・越中瀬戸・博（焼レンガ）・五輪塔・石臼・漆器椀・木札・杭などが出土しました。石組井戸の石には、五輪塔や石臼が転用されていました。

江戸時代に入り、戦国時代の堀が埋まった後に溝や石組井戸などが掘られたところが確認され、落城後に集落が広がっていったと考えられます。

（堀内大介）



石組井戸

いわいどに かたがた 庵谷・片掛銀山遺跡、長棟鉛山遺跡の分布調査報告

1. 山の遺跡を見つける

分布調査とは、田畠や山間部を歩いて地表に落ちている土器のかけらや人工的に造られた地形を見きわめ、遺跡を見つける調査です。平成 23 年度は富山市南部の山間部にある鉱山跡の調査を行いました。

2. 庵谷・片掛銀山遺跡

富山市南部、神通川左岸の庵谷・片掛地区にあります。おおよそ東西 2 km、南北 1 km の範囲に広がります。銀山の発見は天正年間（16 世紀末頃）といわれ、寛永年間（1640 年頃）に衰えますが、その後も經營は続いていると考えられます。

鉱石を探るための坑道の入口（坑口）が 38 地点で確認できました。多くが谷の斜面に掘られており、右の写真のように内部が崩落せず、旧状を良く留めているものもあります。坑口の近くには平坦な場所があり、ここで鉱石を選別する作業を行っていた可能性があります。

なお、鉱山跡を縦断するように旧飛騨街道が走り、地面を逆台形状に掘り壅めて道としています。明治以降とみられる蹄鉄を採集しており、牛馬による運搬があったことがわかります。



坑道の内部

3. 長棟鉛山遺跡

富山市南部の岐阜県飛騨市との境に位置します。寛永 3（1626）年に大山佐平次が発見したといわれ、最盛期は正保年間（1644）頃までの約 20 年間でした。盛時には平均して年 6 万貫ほどの鉛が採掘され、家数 300 軒、小屋 800 軒があったといわれています。

調査では、坑口を 31 地点で確認しました。富山・岐阜県境の池ノ山（1,368.7 m）周辺に多くみられます。また、製錬時に生じる不純物が大量に捨てられた製錬場跡なども見つかっています。これらの坑口や製錬場の一部は、天保 3（1832）年の『新川郡山室組長棟村領絵図』にも描かれています。



坑口

これまでほとんど明らかにされていなかった鉱山跡の一端を把握することができました。いずれも加賀藩の時代から藩の産業を支えてきた重要な鉱山遺跡です。より詳しい調査で時期や性格を把握していくことが課題となります。

（野垣好史）

はじめに

富山平野を流れる神通川は、富山市街地西部において、治水のための直線化工事（通称駆越線工事、明治 34(1901)～36 年）により大きく旧状を変えた。神通川の中下流は、大きな蛇行が多く、また旧河道跡も各所に残る。第 1 図は明治以前の河道跡を復元したものである。

昭和 50 年前後に、富山市考古資料館に神通川河川敷から採集された土器が寄贈された。またその後埋蔵文化財センター旧職員が神通川河川敷で数片の土器片を採集した。本稿ではそれらを紹介し、そこで採集された意義について検討する。

1 採集地の状況

考古資料館に寄贈された土器は、神通川と井田川の合流点の西側河川敷（図 1 の A 地点）において採集された。ここは礫原となっている。

旧職員が土器片を採集したのは、富山北大橋の下の河川敷（図 1 の B 地点）である。ある程度広がりをもって分布していたという。ここは葦原となっており、表層には砂が堆積している。両地点ともに増水時に水没する。



図 1 遺物採集地と河川流路跡 ベース図は明治 44 年

2 土器の概要（図 1）

1 は A 地点採集の須恵器である。器面の摩滅は少ないが、割れ面や角は小剥離が顕著で、縄中でローリングを受けたと思われる。径 10.2cm のぶ厚い円盤形底部に、ハの字形に広がる体部がつく器形で、厚底鉢と呼ばれる（小松市教委 1999）。底部が体部下端より外に突出するのが大きな特徴である。底面は摩滅が著しい。底面及び底部側面はケズリ仕上げである。

このような厚底鉢の類例は、8 世紀中頃の富山市柄谷南窯（富山市教委 2002）、8 世紀前半の射水市小杉流通業務団地内 No.16 窯（富山県教委 1980）・小矢部市松永 I 窯（石川考古研ほか 1988）・8 世紀後半を主体とする富山市百塚住吉 D 遺跡（富山市教委 2011）などがある。本例と松永 I 窯以外のものは、底面に多くの刺突穴がある。これらはいずれも 8 世紀代であり、本例も 8 世紀代と考えることができる。

2～4 は B 地点採集の土器である。器面の摩滅が著しい。

2 は須恵器杯底部で、高台をもつ。底部径 8cm。高台は外側に踏ん張る形で、体部の立ち上がりは高台から離れて立ち上がる。8 世紀前半頃とみられる。

3 は須恵器壺体部片である。直径 18cm。ハの字形に折れ曲がる部分で、沈線があることから、長頭壺とみられる。

4 は、珠洲焼大壺である。頸部から体部にかけての部分で、体部外面は平行タタキである。タタキの深さが浅く室町以降と推定される。胎土に黒色粒を多く含み、海綿骨針は含まない。

3 古代～中世における神通川周辺の遺跡

神通川河川敷採集のこれらの土器は、多少の流下はあるものの、採集地近隣の遺跡に存在していたものと推定される。図 1 の旧河道復元図によれば、採集された地点付近は両地点と

もに陸地部分（微高地となって島状に残った、いわゆる中州）であり、そこに遺跡が存在していた可能性が高い。両地点とも現在埋蔵文化財は確認されていない。

同様な状況は、神通川河口の富山市草島においても認められている。河底掘削中に出土した縄文前期から江戸時代までの遺物は、上流から流れ着いたものではなく、かつて遺跡が存在したことを見ている（古川 2005）。

採集された土器はほとんどが8世紀代とみられる。奈良時代における郷庄比定として藤田富士夫氏の検討があるが、これによればこの周辺は婦負郡大桑郷・正本郷の北方に当たり、比定地となっていない。河川氾濫や流路変更が頻繁で、安定的な生産經營ができないといった地理的条件のため、遺跡の形成があっても短期にとどまり、長期・大規模な遺跡形成が困難であったことがその理由であろうか。

4 おわりに

本稿の作成にあたり、藤田富士夫氏・岩崎聰尋氏のご教示を得た。お礼申し上げます。
(古川知明)

参考文献

- 石川考古学研究会・北陸古代土器研究会 1988 『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』
小松市教育委員会 1999 『林タカヤマ黒跡』
富山県教育委員会 1980 『富山県小杉町・大門町小杉流通業務団地内遺跡群第2次緊急発掘調査概要』
富山市教育委員会 2002 『富山市柄谷南遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
富山市教育委員会 2011 『富山市百塚住吉D遺跡発掘調査報告書』
藤田富士夫 2002 「2.古代婦負郡の「郷」比定と柄谷南遺跡の位置」『富山市柄谷南遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
古川知明 2005 「神通川底出土遺物のこと」『草島校下の歴史』第50号 草島校下郷土史会

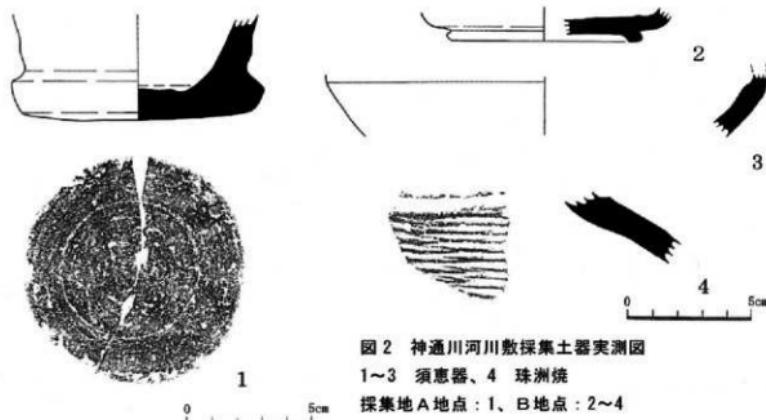


図2 神通川河川敷採集土器実測図

1~3 須恵器、4 珠洲焼

採集地A地点：1、B地点：2~4



1 須恵器



2・3 須恵器、4 珠洲焼

平成23年度埋蔵文化財センター事業

1 埋蔵文化財調査

調査名(遺跡No.) 所在地 調査原因 面積(m²) 調査結果 遺跡の種類

調査名(遺跡No.)	所在地	調査原因	面積(m ²)	調査結果	遺跡の種類
米田大堀(201021)	米田町1丁目外	自己用住宅建築	143.35	平安掘立柱建物、平安廐、平安土塹、平安ピット／平安須恵器、平安土師器	廐跡
百鬼住居D(201083)	寺島外	夙嘗基幹施設整備事業真羽和合2期地区施設工事	493	古代掘立柱建物、古代土塙、古代窓穴、古代廐跡、古代廐、古代土塙、古代階段／古代須恵器、古代土師器、古代土器	廐跡
西金屋・西金屋廐跡(201293)	古沢	自己用住宅建築	176	平安土塙などり、平安土師器而成造構、平安土塙、平安土坑、平安窓穴建物／提土器、平安土師器、平安須恵器、平安土器	集落・その他の生産遺跡(土塙)
富山城跡(201397)	本丸	公園石垣整備	25	江戸土塙／古代廐跡、中世廐跡、中世青瓦、江戸かわらけ、江戸越中廐戸、江戸廐戸、江戸瓦、江戸瓦、江戸土塙、近世瓦	城跡
富山城跡(201397)	丸の内1丁目	松川処理分区雨水貯留施設施工事	133.88	江戸土塙／中世白瓦、江戸かわらけ、江戸越中廐戸、江戸丸山、江戸越中廐戸、明治瓦	城跡
笠本郷Ⅱ(361068)	八尾町高畠寺外	夙嘗往場整備	1,200	弥生土塙、古代掘立柱建物、近世梯形、不明ピット、不明土塙／弥生土器、古代土器、古代須恵器、中世土師器、中世廐跡、近世廐跡	集落
計6件			2,171.23		
22年度 総括(3月)					
富山城跡(201397)	本丸	城址公園整備	87	江戸土塙、江戸土塙、昭和土石積／古代須恵器、江戸かわらけ、江戸越中廐戸、江戸瓦、江戸瓦、江戸統軒、近代陶器器、近代瓦	城跡

試掘調査 因先予定地内の遺跡の有無などを確認する調査です。＊は立会調査

調査名(遺跡No.)	所在地	調査原因	面積(m ²)	調査結果	調査結果
磐瀬天神(201061)	若瀬古志町	夙嘗施設設置工事・新2品質管理棒新設工事	648.96	遺跡なし	
真羽野田(201066)	真羽野田	市道野田2号線道路改良工事	140	遺跡なし	
*					
打出(201009)	打出	自己用住宅建築	167.08	遺跡なし	
今市(201010)	布目	自己用住宅建築	331.87	遺跡なし	
今市(201010)	寺島外	自己用住宅建築	333.74	弥生廐、弥生土塙、弥生ピット／弥生土器	
今市(201010)	布目	自己用住宅建築	232.13	遺跡なし	
今市(201010)	八町	自己用住宅建築	468.39	江戸近世陶器	
今市(201010) *	八幡新町	カーポート建築工事	38.91	遺跡なし	
今市(201010)	西方荒屋外	県道練合宮尾崎道路改良工事	3,988	弥生廐、弥生ピット、不明土塙／弥生土器	
今市(201010)	布目外	自己用住宅建築	179.61	遺跡なし	
西方西野原(201011)	西方西野町	防災倉庫設置工事	132.5	不明廐／なし	
西方青戸荘(201015)	西方荒屋	ガソリンスタンド・コンビニ建蔽工事	1,173	遺跡なし	
西方青戸荘(201015)	西方荒屋外	県道練合宮尾崎道路改良工事	200	弥生廐、平安須恵器	
車島(201016)	車島	自己用住宅建築	92.44	遺跡なし	
車島(201016)	車島鶴田外	自己用住宅建築	489.24	遺跡なし	
東島(201016)	車島	坊塚園面開拓整備工事	361.52	遺跡なし	
森(201019)	森1丁目	自己用住宅建築	222.62	明治陶器	
森(201019) *	森3丁目	篠跡基礎局工事	3	遺跡なし	
米田大堀(201021)	米田町1丁目	自己用住宅建築	333.21	遺跡なし	
大村城(201025)	海岸通	自己用住宅建築	202.35	遺跡なし	
高来(201033) *	高来黒崎外	カーポート建築工事	22.12	遺跡なし	
吉条南(201043) *	野中	公民館建築工事	20	中世廐、不明ピット、不明土塙、不明廐／古代須恵器、古代土師器、中世土器、江戸越中廐戸	
宮条南(201043) *	野中	市道野中3号線道路改良工事	34	遺跡なし	
宮条南(201043) *	町坂	自己用住宅建築	65.48	弥生(中)廐、弥生(中)穴／弥生(中)弥生土器、弥生(中)綠色磁灰岩	
水橋荒町・辻ヶ堂(201044)	水橋辻ヶ堂	宅地造成工事	292	遺跡なし	
水橋荒町・辻ヶ堂(201044)	水橋辻ヶ堂	駐車場造工事	598	遺跡なし	
水橋荒町・辻ヶ堂(201044) *	水橋辻ヶ堂	市道水橋辻ヶ堂新道1号線外1側道路改良工事	100	遺跡なし	
真羽本郷(201062)	本郷町	自己用住宅建築	450.29	遺跡なし	
真羽本郷(201062)	本郷中部	下水道施設工事	33	遺跡なし	
真羽本郷(201062)	本郷中部	自己用住宅建築	711.48	高来佛、高来町洲原、高来町中世土器、高来町古廐戸、高来町廐、江戸越中廐戸、江戸廐、江戸瓦、近代陶器器	
真羽本郷(201062)	本郷中部	自己用住宅建築	331.49	遺跡なし	
真羽本郷(201062)	本郷中部	自己用住宅建築	300.22	江戸越中廐戸、江戸廐、近代陶器器	
真羽本郷(201062) *	本郷中部	市道真羽本郷17号線調査工事	736	遺跡なし	
大堀(201063)	大堀西	駐車場造工事	98	遺跡なし	
新瀬寺城跡(201066)	新瀬寺城跡外	下水道施設工事	252	遺跡なし	

關宿寺城跡(201066) +	關宿寺	下水道施設工事	456.4 關宿場、江戸坂、江戸塙、穀園～江戸ビット、穀園～江戸土 坂、戰国から江戸、穀園せん、戰国陣地、戰国曲物、鐵 板、江戸瓦、江戸越中御戸、江戸唐津、江戸伊万里、 不明石臼
關宿寺城跡(201066) +	關宿寺	下水道施設工事	325 關宿場、中世ビット、江戸ビット、江戸土坂、江戸井戸、 不明瀬／中世都川瀬瀬、江戸かわらけ、江戸瓦万里、江戸 唐津、江戸越中御戸、中世～江戸五輪塔（火輪、木輪、地 輪）、中世～江戸石臼、中世～江戸漆器類、中世～江戸木 札、中世～江戸灰
關宿寺城跡(201066) 關宿寺本館(201066)	關宿寺	寺院建築工事	79.22 江戸土坂、江戸塙／江戸越中御戸
西二俣(201067)	西二俣	自己用住宅建築	631.09 江戸塙、江戸土坑、江戸ビット／中世瀬洲、江戸かわら け、江戸越中御戸、江戸唐津、江戸伊万里
西二俣(201067) *	西二俣	下水道施設工事	263.1 道跡なし
西二俣(201067) *	西二俣	下水道施設工事	259.9 不明瀬／なし
西二俣(201067) *	西二俣	自己用住宅建築	309 道跡なし
東老田Ⅰ(201072)	東老田	自己用住宅建築	597.32 道跡なし
東老田Ⅰ(201072)	東老田	東老田及び倉庫建築工事	784.01 道跡なし
東老田Ⅰ(201072)	東老田	自己用住宅建築	198.74 道跡なし
東老田Ⅰ(201072)	東老田	自己用住宅建築	1,064.7 道跡なし
東老田Ⅰ(201072)	東老田	自己用住宅建築	461 道跡なし
中老田Ⅱ(201078) *	中老田	下水道施設工事	70 道跡なし
小竹貝塚(201106) *	真羽町北	地中電線普通路工事	70 道跡なし
小竹貝塚(201106) *	真羽町北	地中電線普通路工事	0.48 鶴文土器、江戸越中御戸
小竹貝塚(201106) *	真羽町北	新潟沼川第11工区改良工事	23 鶴文(前)ビット、鶴文(前)土坑、鶴文(前)堅六住屋／鶴文 (前)鶴文土器、鶴文(前)堅六住屋石井、鶴文(前)被熟繩
善光寺魔度(201106) *	北代	市道北代3号改良工事	74 道跡なし
八町II(201109)	八町南	鉄筋壁工事	488 道跡なし
八町II(201109)	八町南	鉄筋壁工事	193 道跡なし
真羽三ツ塚(201140)	真羽町	車庫壁工事	105 道跡なし
道分沢の松(201149)	道分沢	道分茶屋12号林道改良工事	350 道跡なし
道分沢の松(201149)	道分茶屋ノ松	車庫壁工事	1,096.77 古代須恵器
真羽モグラ池(201150)	真羽町平山老山	自己用住宅建築	286.22 道跡なし
真羽富田村(201150)	北代佐佐波	マイナーバイパス併設共同住宅建築 工事	758.64 道跡なし
善光寺横穴墓(201179)	安美坊	給水管改修工事	30 不明土坑／なし
百塚(201189) *	百塚	歩道電詰基地局建築工事	2 不明穴／なし
百塚(201189) *	百塚	広告看板設置工事	1.8 古墳周溝／なし
豊田中吉原(201197)	豊田本町2丁目	無縫基地局工事	4 道跡なし
豊田中吉原(201197)	豊田本町2丁目	自己用住宅建築	256.71 道跡なし
新屋敷田(201204) *	新屋	カーボート建築工事	60.01 道跡なし
中富居(201206)	上富居	自己用住宅建築	114.8 道跡なし
中富居(201206)	上富居	自己用住宅建築	110.7 道跡なし
宮町(201210)	宮町	農業廻場施設工事	143.59 道跡なし
龜尾(201228) *	水橋尾尾尾	白山川／ベックゴルフ場施設工事	70.4 道跡なし
水橋金広・中萬場 (201251) *	水橋中萬場	市道水橋金広中萬場側道路改良 工事	48 道跡なし
中老田Ⅳ(201269) *	中老田	下水道施設工事	10 道跡なし
中老田南IV(201277)	西二俣	下水道施設工事	142 道跡なし
砂川カタダ(201284)	東老田	下水道施設工事	192 道跡なし
砂川カタダ(201284)	東老田	下水道施設工事	30 道跡なし
古作南IV(20131)	古作	自己用住宅建築	448 古代土師器
富山城跡(201397) *	本丸	城址公園整備	2,000 江戸土壘／江戸瓦
富山城跡(201397) *	本丸	護岸施設設置工事	18.7 江戸土壘／中世土師器、近世土師器
富山城跡(201397) *	本丸	消防栓設置工事	13 道跡なし
富山城跡(201397) *	経山輪地先	歩道無骨設置工事	1,000 明治陶磁器、明治割石
富山城跡(201397) *	本丸	城址公園整備	200 江戸土壘／江戸瓦
富山城跡(201397) *	本丸	城址公園整備	100 江戸土壘、江戸瓦／江戸かわらけ、江戸瓦、江戸軒
富山城跡(201397) *	本丸	城址公園整備	300 江戸土壘／なし
中世富山城推定地 (201398)	千石町5丁目	自己用住宅建築	250.81 道跡なし
中世富山城推定地 (201398)	千石町	自己用住宅建築	352.45 江戸塙、江戸廣、江戸土坑／宝町塙、宝町中世土器、 江戸越中御戸、江戸唐津、江戸伊万里、近代越中御戸、近 代唐津、近代伊万里
中世富山城推定地 (201398)	千石町	車庫壁工事	143.72 江戸大廣／江戸塙、江戸土坑、江戸瓦
中世富山城推定地 (201398)	千石町	駐車場造成工事	80.33 江戸越中御戸、江戸肥前、江戸濃器類、江戸下駄、江戸著 物製品、江戸板木製品、近代陶器等
平岡神明社裏 (201474)	平岡字山ノ谷	平岡神明社殿造営工事	1,901.75 道跡なし
黒森大屋(201479)	黒森字大屋前	宅地造成工事	648 古代河川跡／古代土師器、古代須恵器、江戸越中御戸

高瀬大屋(201479) *	黒板	市道高瀬29号線道路改良工事	94	遺跡なし
八日町(201481) *	八日町	八日町地区水改良工事	175	遺跡なし
畠原町島ノ木 (201484)	福川町	公園造成工事	19,000	古墳～古代墓、古代穴、古代土坑、古代須穴住居／古墳土器、古代土師器、古代須恵器、古代铁斧、中世土師器、江戸越中唐戸、江戸唐戸
本郷椎木(201488)	本郷町椎木割	自己用住宅建築	351.32	遺跡なし
大宮町(201493)	大宮町 外	自己用住宅建築	473	遺跡なし
上野井田(201513)	上野 外	駐車場造成工事	1,333.66	遺跡なし
吉岡(201525)	吉岡	宅地造成工事	1,357	中世鐵、中世土坑、中世柱穴／绳文(晚)绳文土器、弥生土器、中世土師器、不明陶器
下瀬野(201528) *	下瀬野 外	佐川改良工事	580	遺跡なし
下瀬野(201528) *	安養寺	下水道建設工事	440	遺跡なし
下瀬野(201528) *	安養寺	下水道建設工事	300	遺跡なし
高田・森田瑞泉寺跡 (201530)	高田	新築建築工事	333.92	遺跡なし
阿尾(201531)	上魚野 外	自己用住宅建築	96.2	绳文土器
阿尾(201531) *	上根野・辰巳	市道安養寺上根野線外1線道路改良工事	71	遺跡なし
布市北(201532)	布市	宅地造成工事	590.28	益田土師器
布市北(201532)	布市新町	自己用住宅建築	345.1	遺跡なし
岡(201535)	岡	自己用住宅建築	490	遺跡なし
上祇野(201566)	上祇野	東京建業工事	66.5	绳文土器
上布質(201576)	上布質	自己用住宅建築	499.06	遺跡なし
金星・古屋敷(201586)	金星	市道金星21号線道路改良工事	90	遺跡なし
新日(301025) *	坂塚字下平割	電気調節設備GIS化工事及び付帯工事	4,895.62	绳文土器
新日(301025)	坂塚字下平割	既存の増設替工事及び電力ケーブル埋設工事	2,500	遺跡なし
坂坂IV(301039)	舟新字小野割	自己用住宅建築	114.15	遺跡なし
万願(301080) *	万願寺字神道坂割 外	後谷川改修工事	400	遺跡なし
萬原(301085) *	小羽原	アンテナ基礎工事	4	遺跡なし
尾見丘Ⅱ・小倉中筋 (361066)	八尾町尾見尾	自己用住宅建築	103.51	遺跡なし
寺家・浜子(361071)	八尾町寺家	自己用住宅建築	193.42	平安土師器、平安須恵器
寺家・浜子(361071)	八尾町寺家宇津 田	自己用住宅建築	312.64	绳文土器、平安須恵器、平安土師器
高田(361072)	八尾町黒田 外	公民館建築工事	628	遺跡なし
高田(361072)	八尾町黒田字古 国屋 外	駐車場造成工事	111	遺跡なし
友坂(362002)	舎中町友坂	自己用住宅建築	401	古代土坑、古代縄、古代ビット、不明ビット／古代須器、古代土師器、中世桂圓、不明鉄器
友坂(362002)	舎中町友坂	自己用住宅建築	400	不明縄／古代土師器、古代須器
二本榎(362016)	舎中町小長沢 外	主要地方道小杉種中鹿道路改良工事	715	古墳(後)古墳／绳文土器、绳文石錐、古墳(後)須恵器
二本榎(362018)	舎中町新町	主要地方道小杉種中鹿道路改良工事	1,720	遺跡なし
下邑東(362042)	舎中町羽根	共同生糸織電線3種施設工事	2,208	古代縄／古代土師器、古代須恵器
下邑東(362042) *	舎中町羽根	高齢者交流広場等整備事業(舎中 パーク内)	16.2	土坑／古代須恵器、古代土師器
下邑東(362042)	舎中町下邑	農業収量施設工事	316	遺跡なし
源尾 I・南部 I (362129) *	舎中町高日附	下水道建設工事	772	遺跡なし
神坂 I (362132)	舎中町神坂	自己用住宅建築	203	不明縄／なし
片掛西(364617) *	片掛字井ノ平	市道庵谷片掛線外消音パイプ設置工事	215	遺跡なし
計127件(451)			74,340.09	
22年度 総額(3月)				
大村(201003)	南岸通字古城割	駐車場造成工事	473	古代縄／古代土縄・近世陶器
打出(201009)	打出字高田	自己用住宅建築	326.01	遺跡なし
今市(201010)	八町	自己用住宅建築	466.81	遺跡なし
富永南(201043)	野中	公民館建築工事	922	中世縄、中世ビット／古代土師器、古代須恵器、中世土師器、中世桂圓
小出城跡(201055)	水橋小出	自己用住宅建築	158.99	江戸縄／江戸越中唐戸、江戸唐津、江戸伊万里、江戸磁器
大坂南(201064)	大坂南	墓地造成工事	1,053	绳文(中)绳文土器、中世桂圓、中世土師器、江戸越中唐戸、江戸唐津、江戸伊万里
新星殿田(201204)	新星	自己用住宅建築	336	遺跡なし
高山城跡(201397) *	地番4丁目	延年ガス管替工事	60	遺跡なし
山底東(201487)	山底字東田削	美谷谷堆塗工事	225.70	遺跡なし
布市北(201532)	布市北	自己用住宅建築	326.98	中世土師器
中大久保(360108)	中大久保坂削	工場塗装工事	438.96	遺跡なし
春日(361025)	坂塚字下平割	電気調節設備GIS化工事	5,054	绳文(中)横／绳文(中)绳文土器、绳文(中)石皿、绳文(中) 磨制石斧、绳文(中)敲石
源尾 I・南部 I (362129) *	舎中町高日附	下水道建設工事	772	遺跡なし
千疊田(362142)	舎中町千里	自己用住宅建築	937	遺跡なし

2 遺跡地図管理

富山市内の埋蔵文化財包蔵地の総数は1,050箇所、面積は73.26k^m²（平成24年3月末現在）です。これは富山市全城の面積1,241.85k^m²の約5.90%にあたります。これらの埋蔵文化財包蔵地は遺跡地図に登載され、埋蔵文化財センターをはじめ、市の開発部局、市立図書館、各教育行政センターで閲覧することができます。

【これまで発行した遺跡地図】

- ①『富山市遺跡地図 埋蔵文化財包蔵地所在地地図(改訂版)1.旧富山市域』 平成17年4月
 - ②『富山市遺跡地図 埋蔵文化財包蔵地所在地地図(改訂版)2.旧大沢野町・大山町・八尾町・婦中町・山村田・細入村域』 平成17年4月
 - ③『富山市遺跡地図 埋蔵文化財包蔵地所在地地図(改訂2版)大沢野地域』 平成19年3月
 - ④『富山市遺跡地図 埋蔵文化財包蔵地所在地地図(改訂2版)大山地域』 平成20年3月
 - ⑤『富山市遺跡地図 埋蔵文化財包蔵地所在地地図(改訂2版)婦中地域』 平成21年3月
 - ⑥『富山市遺跡地図 埋蔵文化財包蔵地所在地地図(改訂2版)細入・山田地域』 平成22年3月
- ⑦『富山市遺跡地図 埋蔵文化財包蔵地所在地地図』(②・④～⑥)の、八尾・婦中・山田・大山地域の一部を更新 平成23年3月

平成23年度の分布調査とその他の調査等による埋蔵文化財包蔵地の新規登録、遺跡範囲の変更等

(1) 分布調査による新規遺跡登録

大山地域

No.	遺跡名(遺跡番号)	所在地	種別	面積(km ²)	時代(時期)
1	棚ヶ原遺跡(302087)	棚ヶ原字滝又山割	塚	5,600	不明

八尾地域

No.	遺跡名(遺跡番号)	所在地	種別	面積(km ²)	時代(時期)
1	上ノ山城跡(361095)	八尾町字上ノ山	城館	14,700	中世

細入地域

No.	遺跡名(遺跡番号)	所在地	種別	面積(km ²)	時代(時期)
1	庵谷・片掛銀山遺跡(364036)	庵谷、片掛	鉱山	1,180,000	近世

(2) 分布調査による遺跡範囲の変更等

八尾地域

No.	遺跡名(遺跡番号)	面積(km ²)	備考
1	布谷砦跡(361043)	8,000	北側に遺跡位置を変更

大山地域

No.	遺跡名(遺跡番号)	面積(km ²)	備考
1	長棟船山遺跡(302085)	850,000	遺跡名変更、北側・西側・東側範囲縮小

3 展示・普及

(1) 発掘速報展

①発掘速報展 2010「歴史のタイムカプセル

貝塚・古墳・城・近代建築」巡回展

i 安田城跡資料館

平成23年4月19日～5月15日

観覧者数615名



発掘速報展巡回展(安田城跡資料館)

ii 大山歴史民俗資料館

平成 23 年 6 月 4 日～7 月 18 日

観覧者数 411 名

展示遺跡 小竹貝塚、順海寺城跡、惣曲輪遺跡、富山城跡百塚遺跡、薬師岳山頂遺跡（大山歴史民俗資料館のみ）

主要展示品 人骨レプリカ、石製装飾品、骨製装飾品（小竹貝塚）、墨書き土器（総曲輪遺跡）、奉納模造剣（薬師岳山頂遺跡、大山歴史民俗資料館のみ）

②発掘速報展 2011 「古代の有力者たちー古墳・役所ー」

富山市役所多目的コーナー

平成 24 年 3 月 5 日～3 月 9 日

展示遺跡 二本榎遺跡、米田大覚遺跡、百塚住吉 D 遺跡、百塚遺跡、西金屋・西金屋塚跡、館本郷 II 遺跡

主要展示品 須恵器、ガラス玉、刀子（二本榎遺跡）、墨書き土器（米田大覚遺跡）、馬具、轡、鐵族（百塚遺跡）ほか

観覧者数 717 名



発掘速報展(富山市役所)

(2) 所管施設等企画展示

①北代縄文広場

i ミニ企画展「小竹貝塚一貝で装うー」

期間 平成 23 年 8 月 5 日～平成 24 年 2 月 12 日

内容 貝塚から出土した装身具（貝輪、骨製・歯牙製・石製）から、遺跡内で製作された貝輪の製作過程や、縄文人の装いについて探りました。

主要展示品 貝輪・骨製管玉・骨製髪針・歯牙製垂飾・石製块状耳飾・石製垂飾・貝・人骨レプリカ・貝層剥ぎ取り・調査写真パネル

観覧者数 3,849 名

ii ミニ企画展「婦中地域の縄文遺跡(2) 牛滑遺跡」

期間 平成 24 年 2 月 16 日～平成 24 年 3 月 31 日

内容 牛滑遺跡をはじめとした婦中地域の縄文遺跡に焦点を当て、当時の暮らしを紹介するとともに、鏡 I 遺跡と北代遺跡の有孔鍔付土器の比較を行いました。

主要展示品 縄文土器（牛滑遺跡・鏡坂 I 遺跡）、石器、弥生土器

観覧者数 62 名（平成 24 年 2 月末現在）



北代縄文広場ミニ企画展

②安田城跡資料館

i ミニ企画展「富山市の中世城館(5) 寺島館跡」

期間 平成 23 年 6 月 21 日～平成 24 年 2 月 12 日

内容 鎌倉時代の空堀や土橋などの写真パネルや出土品を通して、神通川下流で新たに検出された中世館跡について探りました。

主要展示品 須恵器・土師器・中世土師器・珠洲・製塙土器

観覧者数 6,508名

Ⅱミニ企画展「富山市の中世墓(1) 墓I遺跡」

期間 平成24年2月16日～平成24年3月31日

内容 遺跡と一括して富山市指定史跡となっている出土品（蔵骨器など）や写真パネルから、有力者層の墓地のあり方や当時の民衆の暮らしについて探りました。

主要展示品 珠洲・八尾・中世土師器

観覧者数 64名（平成24年2月末現在）

③大山歴史民俗資料館

企画展「薬師岳と人とのかかわり」

期間 平成23年9月21日～平成23年12月4日

内容 薬師岳山頂への奉納品や開山伝承、信仰などを通して、現在までつながる薬師岳と人とのかかわりや歴史について紹介しました。

主要展示品 奉納模造剣・刀子・青磁・釘・銅

製品（薬師岳山頂遺跡）

観覧者数 691名



百塚住吉D遺跡発掘調査現地説明会

(3) 遺跡発掘調査現地説明会

①百塚住吉D遺跡

平成23年9月23日 参加者数 70名

②二本榎遺跡

平成23年12月3日 参加者数 70名

③富山城跡

平成24年1月13日 参加者数 90名

(4) 富山城ツアー

平成23年6月～11月

参加者数 350名（4回開催）

担当：古川知明所長、野垣好史主任学芸員、坂森幹浩郷土博物館専門学芸員

	開催日	見学場所	参加者数
1	6月1日	鉄門石垣・二ノ丸・土壘・搦手石垣	70
2	8月3日	本丸御殿跡み石・鉄門石垣・築堤	120
3	10月5日	鉄門石垣・西ノ丸	80
4	11月2日	千歳御門・鉄門石垣・搦手石垣・東出丸	80
計			350



富山城ツアー

(5) 出土品貸出

①富山市郷土博物館 常設展「各地の中世館出土品」

貸出期間 平成23年4月1日～平成23年9月16日

貸出資料 小出城跡 鉄砲玉・焼けた宝鏡印塔・馬の椎骨・腰刀・馬の第二前臼歯・焼けた木

②富山市郷土博物館 常設展「リアルタイム富山城」

- 貸出期間 平成 23 年 4 月 1 日～平成 23 年 10 月上旬
 貸出資料 富山城跡 中世土師器・珠洲焼・瀬戸美濃・青磁・白磁・青花ほか 4 点
- ③朝日埋蔵文化財保存活用施設（まいぶんKAN）企画展「企画展「翡翠ーアジアノミドリ」」
 貸出期間 平成 23 年 4 月 6 日～平成 23 年 7 月 4 日
 貸出資料 平岡遺跡 玑飾型垂飾 1 点
- ④射水市新湊博物館 企画展「土偶ってなに！？～縄文人一万年の祈り～」
 貸出期間 平成 23 年 6 月 10 日～8 月 7 日
 貸出資料 古沢遺跡・追分茶屋遺跡・北代遺跡・長岡八町遺跡・鏡坂 I 遺跡 土偶 9 点
- ⑤大山歴史民俗資料館 企画展「薬師岳と人のかかわり」
 貸出期間 平成 23 年 8 月 30 日～平成 23 年 12 月 7 日
 貸出資料 薬師岳山頂遺跡 奉納模造剣 5 点・刀子 1 点・青磁 2 点・釘 3 点・銅製品 2 点
- ⑥富山市郷土博物館 常設展「各地の中世城館出土品」
 貸出期間 平成 23 年 9 月 17 日～平成 24 年 4 月上旬
 貸出資料 小出城跡 漆器 6 点
- ⑦富山市郷土博物館 企画展「前田利長生誕 450 年『富山様』利長」
 貸出期間 平成 23 年 11 月 7 日～平成 24 年 2 月上旬
 貸出資料 富山城跡 金箔張竹製品 1 点・無刻梅鉢紋軒丸瓦 2 点・唐草紋軒平瓦 2 点
- ⑧小松市教育委員会 重要文化財指定記念特別展「八日市地方遺跡から越の国へ」
 貸出期間 平成 23 年 10 月 13 日～平成 24 年 1 月 13 日
 貸出資料 六治古塚墳墓・鏡坂墳墓群・富崎墳墓群 弥生土器 36 点
- ⑨富山市郷土博物館 常設展「リアルタイム富山城」
 貸出期間 平成 24 年 2 月 4 日～平成 24 年 9 月 30 日
 貸出資料 富山城跡 イルカの骨 16 点・ハマグリ 1 点・イワガキ 3 点・他 4 点

(6) 講座

- ①富山市民大学（市民学習センター）

富山の石文化－考古学から迫る－

1	古川知明所長	下呂石と黒曜石	5 月 17 日
2	堀内大介主査学芸員	小竹貝塚の石文化	5 月 31 日
3	小松博幸主査学芸員	縄文の石器	6 月 7 日
4	細辻嘉門主査学芸員	弥生の石器・石製品	6 月 21 日
5	鹿島昌也主査学芸員	古墳の石—葺石・石室・石製品—	7 月 5 日
6	古川知明所長	城の石垣	9 月 6 日
7	野垣好史主任学芸員	富山藩主墓所と石	9 月 20 日
8	古川知明所長	常願寺川石工の仕事	10 月 4 日
9	小林高範主査学芸員	石製狛犬	10 月 18 日
10	古川知明所長	石塔と祈り	11 月 1 日

- ②富山市民大学プラネット（婦中ふれあい館）

ふるさとに学ぶ

6	堀内大介主査学芸員	婦負の遺跡探訪	8 月 10 日
---	-----------	---------	----------

③富山市民大学プラネット（大山地城市民センター）

うまい水のルーツを探る～立山カルデラと水利用～

6	小林高範主査学芸員	有峰の歴史	9月1日
---	-----------	-------	------

④市役所出前講座

遺跡からみた富山の歴史

1	細辻嘉門主査学芸員	婦中地域の歴史について(神保第二老人クラブ・上井沢公民館・25名)	4月27日
2	小林高範主査学芸員	大沢野地域の遺跡について(さくらの会・東ヶ丘公民館・18名)	5月8日
3	古川知明所長	各願寺宝篋印塔の調査から(「婦中町新町活きいきサロン」・新町公民館・30名)	9月21日
4	鹿島昌也主査学芸員	“まちなか”地下1mの富山城・城下町一市内電車環状線化に伴う発掘調査についてー(富山西ロータリークラブ・富山電気ビル・43名)	12月1日
5	大野英子主査学芸員	婦負開拓の時代ー史跡王塚・千坊山遺跡群ー(富山商工会議所名誉議員クラブ・富山電気ビル・10名)	12月7日
6	細辻嘉門主査学芸員	二本榎遺跡の古墳について(いきいきサロン 小長沢・小長沢公民館・30名)	12月14日
7	鹿島昌也主査学芸員	とやま発掘最前線(富山県立富山東高等学校・30名)	3月5日
8	野垣好史主任学芸員	富山城址公園をめぐる(富山県神社庁・富山城址公園・22名)	3月19日

(7)その他

①社会に学ぶ 14歳の挑戦

奥田中学校(2名) 平成23年6月20日～6月24日

西部中学校(3名) 三成中学校(1名) 平成23年7月4日～7月8日

【業務】図書整理・出土品整理・北代縄文広場管理運営・安田城跡歴史の広場管理運営・館本郷II遺跡発掘調査

②富山市ファミリーパーク「春1番!史跡探訪ウォーク」近藤頸子主査学芸員

親子(19名) 西金屋長尾塚古墳・センガリ山窯跡 平成23年4月24日

③「悠久の森2011 森へかえろう」出席(悠久の森実行委員会)

安達志津(富山市埋蔵文化財センターOG)・小林高範主査学芸員「縄文クッキーを食べてみよう」参加者200名 富山市ファミリーパーク 平成23年8月28日

④市民バス教室(月岡地区)

平成23年9月28日 北代縄文広場来場

(8)研修参加

①平成23年度全史協北信越地区協議会研修会参加 大野英子主査学芸員 長野県長野市
平成23年7月14日～7月15日

②平成23年度文化財担当者専門研修「保存科学Ⅲ(応急処置)過程」参加 堀内大介主査学芸員 独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所 平成24年2月6日～2月10日

③平成23年度埋蔵文化財発掘調査専門職員等研修会参加 小松博幸主査学芸員・大野英子主査学芸員・鹿島昌也主査学芸員・野垣好史主任学芸員・納屋内高史嘱託学芸員 富山県埋蔵文化財センター 平成24年3月1日

4 刊行物

(1) 発掘調査報告書

- No. 45 富山市百塚住吉 D 遺跡発掘調査報告書 II (2012. 2)
- No. 46 富山市百塚遺跡発掘調査報告書 (2012. 3)
- No. 47 富山市館本郷 II 遺跡発掘調査報告書 (2012. 3)
- No. 48 富山市二本榎遺跡確認調査報告書 (2012. 3)
- No. 49 富山市内遺跡発掘調査概要 VI (2012. 3)
- No. 50 富山城跡発掘調査報告書 (2012. 3)
- No. 51 富山市内遺跡発掘調査概要 VII (2012. 3)
- No. 52 富山市内石造物等調査報告書 (2012. 3)

(2) PR 誌・展示図録等

- 富山市の遺跡物語 No. 13 富山市教育委員会埋蔵文化財センター所報 (2012. 3)
- 北代繩文通信 第 33 号 (2011. 12)
- 北代繩文通信 第 34 号 (2012. 3)

5 調査研究

(1) 調査

- ①下番中川家墓地宝篋印塔の調査 (2011. 7) (古川)
- ②西番第 2 慶音堂の石仏群調査 (2011. 7) (古川)
- ③西番第 3 地蔵堂の石仏調査 (2011. 7) (古川)
- ④富山城出土踏み石の調査 (2011. 7) (古川・野垣)
- ⑤深谷山祇樹寺宝篋印塔の調査 (2011. 8) (古川)
- ⑥光嚴寺墓地中川家宝篋印塔の調査 (2011. 8) (古川)
- ⑦八尾町宝幢寺石造物の調査 (2011. 9~12) 古川
- ⑧八川地蔵堂の石仏調査 (2012. 1) (古川)

(2) 論文・報告・紹介 (2011. 4~2012. 3)

富山市内の遺跡に関連するものを含みます。

- 越前慶祐 2011. 5 「各都道府県の動向 16 富山県」『富山考古学年報 (2009 年度版)』第 62 号 日本考古協会
- 小黒智久 2012. 2 「北陸」『東日本における前期古墳の立地・景観・ネットワーク 東北・関東前方後円墳研究会 第 17 回研究大会シンポジウム発表要旨資料集』 東北・関東前方後円墳研究会
- 鹿島昌也 2011. 8 「富山市總曲輪遺跡出土の墨書き土器「家持」について」『大境』第 30 号 富山考古学会
- 鹿島昌也 2011. 10 「富山県の古代生業」『一般社団法人日本考古学協会 2011 年度査定大会研究発表資料集』 日本考古学協会 2011 年度査定大会実行委員会
- 久保浩一郎 2011. 6 「打製石斧による研削実験—使用方法による研削能力の比較と使用痕—」『古代文化』第 63 卷第 1 号 古代学協会
- 小林高範 2011. 12 「旧木須村山神社の奉納劍について」『大山の歴史と民俗』第 15 号 大山歴史民俗研究会
- 佐伯哲也 2011. 3 「富山市八尾町南部の小規模城館について」『富山湾読本』 北日本新聞社
- 高橋浩二 2012. 1 「富山県に出土する弥生時代の鉄器」『富山市考古資料館紀要』第 31 号 富山市考古資料館
- 中村晋也・堀内大介 2012. 3 「富山市願海寺城跡出土埴場の蛍光 X 線分析について」『富山市考古資料館紀要』第 49 号 富山市考古資料館
- 西井龍儀 2012. 2 「忘れられた旧石器 5」『富山考古学会連絡紙』第 224 号 富山考古学会
- 野垣好史 2011. 6 「2010 年の考古学界の動向 古墳時代(北陸)」『考古学ジャーナル』No. 615 ニューサイエンス社
- 野垣好史 2011. 8 「富山県の動向」『中世史・考古学情報』第 10 号 伊勢中世史研究会
- 野垣好史 2012. 3 「薬師岳分布調査報告」『富山市考古資料館紀要』第 31 号 富山市考古資料館
- 藤田富士夫 2011. 4 「日本海文化圏から考える『古事記』『現代思想 Vol. 39-6』青土社
- 藤田富士夫 2011. 8 「魯般式から見た富山県の四隅突出墳・前方後方墳について」『斎藤林の考古学一大竹憲治先生還暦記念論文集』 大竹憲治先生還暦記念論文集刊行会
- 古川知明・龜田正夫 2011. 6 「中大久保遺跡出土の異形磨製石器」『富山考古学連絡紙』第 220 号 富山考古学会

古川知明	2011.6	「富山県地方史研究の動向 考古学関係」『信濃』第 63 卷第 6 号 信濃史学会
古川知明	2011.6	「常願寺川石工製作石仏研究の課題と展望」『北陸石仏の会研究紀要』第 10 号 北陸石仏の会
古川知明	2011.8	「神通川石工とその周辺—近世石工と在地石材一」『大境』第 30 号 富山考古学会
古川知明	2011.11	「北陸の下呂石」『第 4 回下呂石シンポジウム 2011 旅する下呂石—思えば遠くへ行ったもんだー』下呂石シンポジウム実行委員会
古川知明	2012.2	「富山市郷中町藏島地蔵堂石仏とその周辺」『大境』第 31 号 富山考古学会
古川知明	2011.2	「薬師岳山頂の奉賽品について」『大境』第 31 号 富山考古学会
古川知明	2011.3	「常願寺川石工牧喜右衛門について」『富山市考古資料館紀要』第 31 号 富山考古学会
細辻喜門	2011.11	「富山・富山城（城下町）」『木簡研究』第 33 号 木簡学会
町田賛一	2011.5	「遺跡連報 富山県小竹貝塚」『考古学ジャーナル』No. 613 ニューサイエンス社
町田賛一	2011.7	「小竹貝塚の繩文人骨」『富山考古学研究』第 14 号 財団法人富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所
町田賛一	2011.11	「小竹貝塚と上久津呂中屋遺跡」『シンポジウム とやまの貝塚 資料集』富山県埋蔵文化財センター
町田賛一・堀内大介・藤田富士夫	2012.3	第 16 回公開講座「いま、明らかになる小竹貝塚—日本海側最大級の貝塚に迫る—」『日本海文化研究所公開講座平成 22 年度記録集日本海を行き交う人・モノ・文化 II』富山市教育委員会
津口優司	2011.11	「北陸の繩文時代人と小竹貝塚出土人骨」『シンポジウム とやまの貝塚 資料集』富山県埋蔵文化財センター
山本正敏	2011.5	「石冠の型式分類と縄年—富山県の資料を中心として—」『縄文時代』第 22 号 縄文時代研究会

(3) 講演・研究発表

小黒智久	東北・関東前方後円墳研究会第 17 回研究大会「東日本における前期古墳の立地・景観・ネットワーク」基調報告「北陸」平成 24 年 2 月 19 日 横浜市歴史博物館
鹿島昌也	県民考古学講座 講演「まちなか地下 1 m の富山城・城下町」平成 23 年 7 月 31 日 富山県埋蔵文化財センター
鹿島昌也	北陸都市史学会第 34 回金沢大会「富山城・城下町を掘る—近世から近代への変遷」平成 23 年 8 月 7 日 石川県政記念館しいのき迎賓館
野垣好史	立山・黒部山岳遺跡調査事業関連市民説明会 発表「薬師岳の分布調査」平成 23 年 4 月 27 日 富山県埋蔵文化財センター
藤田慎一	富山考古学会総会 発掘調査報告「二本榎遺跡における確認調査の成果について」 平成 24 年 1 月 28 日 富山市市民プラザ
古川知明	富山大学教養講座とやま学—近世富山の史料— 講義「富山船橋について」 平成 23 年 6 月 6 日 富山大学人間発達科学部
古川知明	下呂石シンポジウム 2011 「旅する下呂石—思えば遠くへ行ったもんだー」発表「北陸の下呂石」 平成 23 年 11 月 13 日 下呂市民会館

6 組織・事業費

(1) 組織

所長	1	主事	1
	└	主査学芸員	8 (兼務 大山歴史民俗資料館 1・考古資料館 1)
	└	主任学芸員	1 (兼務 考古資料館 1)
	└	嘱託学芸員	5

(2) 事業費

総経費

① 埋蔵文化財調査事業費	109,128 千円
(内訳) 埋蔵文化財調査費	93,250 千円
普及事業費	190 千円
施設管理事務費	15,688 千円
② 文化財保護事業費	53,475 千円
(内訳) 文化財保護事業費	12,983 千円
施設老朽化対策費	6,900 千円
史跡公有化事業費	33,592 千円
③ 一般管理事務費	79,652 千円

研究余話 I 富山市内の近世鉱山について 亀谷銀山・長棟鉱山を中心にして一
小松博幸 (埋蔵文化財センター主査学芸員)

1 越中七かね山

近世(江戸時代)の富山県域には、「越中七かね山」と呼ばれた、七箇所の鉱山(注1)があった。松倉金山・河原波金山・虎谷金山・下田金山・龜谷銀山(富山市)・長棟鉱山(富山市)・吉野銀山(富山市)である(図1)。その内、三箇所の鉱山が現在の富山市域に存在していた。これらの鉱山(七かね山)は、加賀藩により開発され、藩の財政を潤したといわれている。

産出された銀は通貨として重用され、鉛は金や銀の精錬に欠かすことのできない物であるとともに、鉄砲の弾や瓦の一部などにも利用された。

日本では、古代から金銀銅の採掘は行われていたが、産出量が激増したのは16世紀半ばから17世紀前半にかけてであった。戦国大名等が競って開発を進めたことと、灰吹法(注2)の伝来や採鉱・精錬などの鉱山技術の開発が産出量を増やしていた。

2 加賀藩の鉱山支配

加賀藩の鉱山支配については、初期には職制が整備されていなかったため、臨時的・便宜的なものであった。鉱山最盛期の慶長(1596年から1615年)～元和年間(1615年から1624年)の頃には、藩主・前田利長・利常、自らが運上諸役請取状や山の定書を出しておらず、鉱山を直接支配する形となっていた。職制については、以下のとおりである。

- 寛永6年(1629)：御山奉行が設置されたが、他の職と兼務することがあった。
- 寛文4年(1664)：新庄に金山裁許が設置され、運上諸役の徵収等が要務であった。
- 文政4年(1821)：新庄の金山裁許が廃止され、郡奉行の支配に属した。

3 加賀藩の鉱山經營

1. 請山(図2)

山師を配下に持つ、1人ないしは数人の親方が責任をもって藩に対する運上を請け、一山を經營する方法である。請負期間は1年が普通だが、2・3年の場合も少なくなく、数人の有力な親方がそれぞれ請け負うことが多かった。

2. 直山(図3)

山師が親方を介せずに、藩と直結しているもので、間歩(坑道)ごとに運上額を決めて上納する方法である。1年の運上額を決め、毎月末日に上納するのが通例であった。

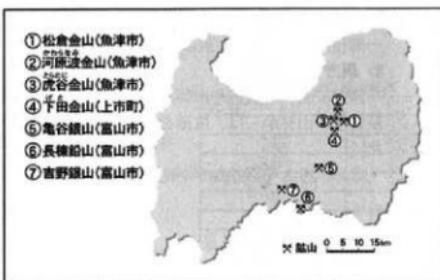


図1 越中七かね山(「富山県史」近世上 1982・一部修正)



図2 請山概略図

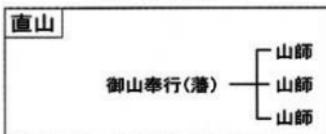


図3 直山概略図

3. 稅

かね山は、鉱山で働く人々の集落を合わせた、特別行政区域のようなものであった。年貢・小物成・雜小物成などの税ではなく、運上諸役が課せられた。諸役銀は、請山の場合は产出した銀の量に対して運上銀子及び鉛で納め、直山の場合は产出した銀の量に対し間歩運上銀で6分の1程度を納めたようである。また、鉱山の集落への入り口には、番所を設けそこを通る商品には「十歩一御役銀」(値段の1割に当たる銀)などを課した。

4. 親方等への特例

請山・直山の親方や山師たちは、鉱山周辺の地に自由に立ち入り、鉱脈を探ることが許可された。最寄りの山林からは、坑道を作るのに必要な木材や小屋を立てるための木を自由に切ることが許された。

なお、町人や百姓などが他国の鉱山へ出稼ぎに出ることは禁じられた。

4 龜谷銀山

1. 龜谷銀山の発見

亀谷銀山は、岩屋山（現在の与四兵衛山）において天正6年（1578）に「あしくら」作左衛門によって、発見されたといわれている。その後、採掘地域は移り、常願寺川支流の和田川沿いの鳥ヶ尾山（1,145m）を中心として、小口川中流域にわたる広範囲な地域に広がった（図4）。

2. 龜谷銀山の繁榮

慶長元年（1596）から、山師の幾兵衛・加平衛により、火箱山・笛平・千貫運上平などで、銀の採掘が大量に行われ、この年に「かね山」となった。最盛期は慶長～元和年間である。この頃の隆盛をうかがわせるものとして、慶長17年に前田利長が亀谷産の銀を1,000枚、花降銀に铸造し、絹布などと共に徳川家康・秀忠にそれぞれ献上している。また、産銀量の多さから、加賀藩の領国通貨（領内で流通させた貨幣）の花降銀・朱封銀などは、亀谷銀山の産出銀の異名といわれるほどであった。鉱山労働に関する人も増え、亀谷に隣接して亀谷新町ができ、さらに、牛を扱う人々が主に住む岡田新町が誕生した。

*貫：江戸時代の一貫は、平均して3,736kg。

*匁：一文銭の目方であることから「匁」と呼び、100匁を1貫とした。

3. 龜谷銀山の衰退

寛永年間から徐々に产出量は衰え始め、寛文年間には、衰えが顕著になった（表1）。元禄年間（1688～1704）以降は、山師が困窮し採掘の支障にならない所に焼畑をおこなうようになった。山師は享保4年（1717）に、畑高（畠の税）を定めるよう藩へ願い出るが、「かね山」であるため認められなかつた。文政4年に、藩の金山政策が変わり金山裁許が廃止され、御手前山（藩の直営）となつた。天保2年（1831）には、「かね山」ではなく、「領付村」（年貢米を納める村）となり、この時代の「亀谷銀山」の歴史に終止符が打たれた。

明治以降に鉱山再興がはかられ、明治20（1887）～31年（1898）には三井鉱山株式会社の所有となり、一時所有が移るが明治43年以降に再び三井鉱山株式会社の所有となつた。亞鉛・鉛などを採掘するが、大正15年（1926）経営の悪化などにより閉山した。

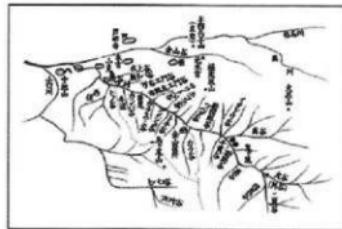


図4 亀谷銀山の谷名（「大山町史」1964）

寛永16年（1639）	30貫目*
17年	30貫目
18年	95貫目
慶安元年（1648）	500匁**
2年	300匁
3年	3貫目
承応3年（1654）	3貫目
寛文3年（1663）	4,505匁
5年	400匁
6年	385.3匁
8年	900匁
貞享3年（1686）	200匁
4年	200匁
元禄6年（1693）	100匁
9年	600匁
10年	250匁
11年	150匁
12年	2,100匁
13年	193匁
14年	100匁

（「大山の歴史」1990・一部修正）

5 長棟鉛山

1. 長棟鉛山の発見

長棟鉛山は神通川の支流、長棟川の水源近くに位置した。海拔約1,000mの高地のため、米は生産できず、野菜などがようやく栽培できる地城だった。

鉛山は、寛永3年に大山 佐平次が発見したといわれている。大山 佐平次は、山崎 佐平次とも呼ばれ出身は佐渡であり、佐渡から亀谷に渡ってきたものと考えられている。

2. 長棟鉛山の繁栄

大山 佐平次の鉛山発見から、正保1年(1644)頃までの約20年間が最盛期であった。多いときには、平均して年6万貫ほどの鉛を産出し、長棟には、家300軒、小屋800軒あったといわれる。

鉛山の発見当初は、大山 佐平次を中心とした諸山となり、寛永3年の長棟山山師等請状では、27人の山師が親方(大山 佐平次)へ産出した鉛のすべてを渡すことを約束している。次いで播磨屋安兵衛が諸山として運営したようである。

3. 長棟鉛山の衰退

正保年間(1644~1648)から寛文6年に鉛の価格が暴落したため、困窮した山師が下山し、鉛の産出量が大幅に下落した。延宝5年(1677)頃には、金沢の町人が鉛の仲買を許され、町人の資本が入ることで生産高が回復し、鉛の産出量が増加し始めた(表2)。しかし、貞享4年(1688)に町人資本が引き上げたことにより、山師は困窮し、再び下山者が続いた。

宝永年間(1704~1711)以降は、採鉛から精錬までを家族中心で行うようになり、経営規模が縮小した。文政4年に藩は、鉛山を活性化させるため「御金山方御仕法方」を実施し御手前山とした。天保3年には、「かね山」ではなく、「領付村」となり、この時代の「長棟鉛山」の歴史は幕を閉じた。

明治20年に三井鉛山株式会社が鉛区を買収したが、昭和10年(1935)には長棟在住者が他所へ移転し廃村となった。

注

(1)鉛山とは、鉱物(鉛石)を掘り出し資源として役に立つ部分を見極め、鉛石から金属を取り出す(精錬)作業を行うところである。江戸時代に栄えた鉛山では、分業で作業が行われ鉛石を掘る人・鉛石を運ぶ人・精錬する人などが多く働いており、その様子は工業地区のようであった。

なお、「越中七かね山」以外にも片掛・庵谷などに金銀山があった。

(2)灰吹法とは、金や銀を鉛石などからいったん鉛に溶け込ませ、動物の骨や松の葉を燃やした灰を用いて、そこから金や銀を抽出する方法である。

引用・参考文献

石原与作 1960 『大山史稿』大山町史編纂委員会

大山町自治振興会連合会 2002 『ふるさと再発見V』

大山町史編纂委員会 1964 『大山町史』大山町

大山の歴史編纂委員会 1990 『大山の歴史』大山町

小糸田 淳 1951 『長棟鉛山史の研究』長棟鉛山史研究会

小糸田 淳 1968 『日本鉛山史の研究』

富山県 1982 『富山県史』通史編Ⅲ 近世上 富山県

表2 長棟鉛山の運上鉛高

延宝5年(1677)	19,827匁
6年	14,936匁
7年	14,529匁
8年	11,456匁
天和元年(1681)	20,540匁
2年	18,362匁
3年	5,785匁
貞享元年(1688)	9,011匁
2年	8,279匁
3年	10,092匁

(「富山県史」近世上 1982・一部修正)

研究余話Ⅱ 発掘調査報告書掲載のためのデジタル写真の処理について
近藤 順子（埋蔵文化財センター主査学芸員）

はじめに

近年、デジタルカメラの急激な普及に伴い、従来銀塩カメラでの撮影が主流であった発掘調査報告書の写真図版においても、デジタル画像を使用することが多くなっている。また、PCとプリンターで簡単に自家プリントができるようになり、銀塩白黒現像焼付けの業務を廃止するラボも増えてきている。

遺物写真是従来 4×5 の大判カメラで撮影するのが鉄則であったが、 4×5 インスタントフィルム・フィルムの製造中止等社会情勢の変化を受けて、馴染みのないデジタルでの撮影に移行せざるを得ない状況となってきている。

これまでのデジタル1眼レフカメラの主流はAPS-Cサイズ(35mmフィルムよりセンサーサイズが小さいため、画角が狭く、交換レンズの焦点距離が約1.5~1.6倍相当となる。)と呼ばれるものだったが、最近ではフルサイズ機(35mmフィルムと同等のセンサーサイズで、銀塩35mmカメラと同様画角)が普及し、中判カメラを超える解像度を持つものも増えてきた。

今回は、フルサイズデジタル1眼レフカメラを用いて撮影した画像のデジタル現像の手順を解説する。使用機材はCanon 5Dmark II、EF50mmf1.4、Speedlite 550EX E-TTL、照明2灯である。

1. デジタル現像

デジタル一眼レフカメラでの撮影では、記録モードは可能な限りRAWとすることが望ましい。記録メモリの容量制限のためJPEGで撮影する場合もあるが、後の処理および保存を考えるとRAWで行うほうがベターである。

JPEGやTIFFなどの画像データはデジタルカメラのイメージセンサーが感知した色情報を補完し、明るさやトーンを整えフルカラー画像データ化したもので、補完や補整の際に色情報を大幅に加工しているため、画質の劣化が伴う。一方、RAW画像はその名のとおり生、未加工の画像である。イメージセンサーが感知した色の情報そのままの画像データのことをさす。そのため一見するとメリハリが少く、のっなりとした画像に見える。これを明るさ・トーンを整えてJPEG・TIFF画像として出力するのがデジタル現像である。RAW画像のデータフォーマットは各メーカー・機種で異なるため、対応ソフトウェアを用意する必要がある。カメラメーカーの自社製現像ソフトウェアのほか、ソフトウェアメーカーから機種に対応した現像ソフトウェアが発売されている。今回はCanon Digital Photo Professional(以下DPP)を使用する。



DPP で撮影した画像を納めたフォルダを開くと RAW のサムネイルが表示される (Canon の場合、拡張子は CR2 となる)。コマを選んで拡大表示させ、ツールパレット RAW 調整画面で簡単な調整を行う。

現像の際、画像の明るさ調整は、RAW 画像調整のヒストグラムでレベル補正を行い、微修正は RGB 画像調整の輝度トーンカーブで行うのが基本である。明るさ・コントラスト等のスライダーはヒストグラムが乱れるため、あまり使わないほうがよい。

その後、「[ファイル] メニューから [変換して保存]」保存するファイルの種類は TIFF16bit を選ぶ。

ここで 16bit にすることは、今後の画像処理に対応するためである。画像処理に使用するソフトウェア Adobe Photoshop のイメージ/モードには「8bit/チャンネル」、「16bit/チャンネル」、「32bit/チャンネル」がある。8bit は 256 階調、16bit は 65,536 の階調で表現した画像で、16bit は階調の幅が圧倒的に広いため、階調飛びも少なく、画像処理を行う場合劣化が少ない。8bit の 256 階調でも人間の目では十分に見えるが、広範囲のグラデーションでは階調が滑らかに出ない。ただ、Photoshop element 等では処理に使えるツールが 16bit に対応していないことがあり、写真の明るさやコントラストなどの調整や、色調補正などのレタッチ作業や階調飛びが起りやすい作業は 16bit で行い、それ以外の作業は 8bit で行うことになる。

2. モノクロ変換の前処理

ここからの作業は Photoshop または Photoshop element を使用して行う。DPP では RAW からダイレクトにモノクロに変換する方法 (ピクチャースタイル モノクロ選択) もあるが、モノクロ変換への前段階として Photoshop での処理があるため、あまり使用しない。

①ダスト処理

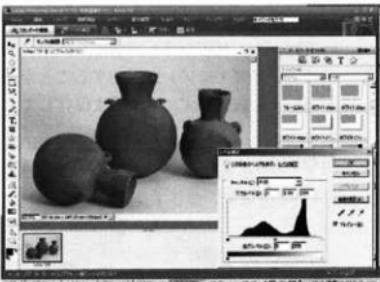
デジタル一眼レフカメラは構造上イメージセンサー上に埃が付きやすい。センサー上に付いた埃は、撮影した画像データに写り込む。そのためソフトウェア等を使って埃の跡を消す必要が出てくる。手順としてはモノクロ化する画像を Photoshop で開き、50%ないし倍表示する。その後、コピースタンプツールを用い、埃をひたすら消していく。

②レベル補正

現像の際、RAW 画像である程度調整はしているが、ここで再度目的に応じて画像調整を行う。「[画像調整] メニューから [ライティング]」[レベル補正] を選択する。

カラー印刷物および Web での利用であれば、ややメリハリの利いたコントラストの高いものへ、報告書用であればコントラストをやや抑えて階調を失わないように調整する。また、遺物の種類に応じて質感を生かすよう調整する。いずれもヒストグラムを見ながら中間の調子を失わないよう注意する。

この補正是レイヤーでも可能であり (新規調整レイヤー)、元画像を失たくない場合はレイヤーで処理するほうが、復元が容易である。



3. モノクロへの変換

カラーで画像を整えた後、モノクロ変換を行う。Photoshop でのモノクロへの変換はグレースケール変換、色相彩度変換、色相ブレンド変換など数通りあるが、グレースケール変換、色相彩度変換はモノクロに適さない。ここでは色相ブレンド変換を用いてモノクロ化を行う。

色相ブレンド変換

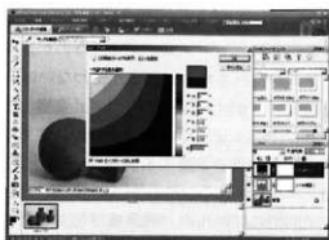
Photoshop のレイヤー合成を利用して、オリジナルのカラー画像上に無彩色画像レイヤーを作ることでモノクロ変換する方法。この変換では明るさ・元の色の違いも自然に表現され、中間調の潰れもない。変換方法は、Photoshop でモノクロ変換するカラー画像を開き、「[レイヤー] メニューから [新規塗りつぶしレイヤー]」[べた塗り] を選択し、「描画モード」で [色相] を選ぶ。次に、「べた

塗りする色を選択」するウインドウで、彩度 0 のグレーを選択。「Web セーフカラーのみに制限」にチェックし、一番左側の色を選ぶ。



[レイヤー]メニューから「新規塗りつぶしレイヤー」

[べた塗り]



「べた塗りする色を選択」

4. モノクロ変換後の処理

モノクロ変換後は印刷目的に応じて画像調整し、保存する必要がある。

ここまで Photoshop データとして作業を進めてきたが、入稿するデータは汎用性のある JPEG や TIFF となる。JPEG はファイルサイズが軽く扱いやすいが、ファイルの開閉等で劣化しやすい。TIFF はファイルサイズが重くなるという欠点があるが、画像劣化を起こさないため保存性が高い。

Photoshop データのレイヤーを統合し ([画像を統合])、使用する目的に対して画像サイズを調整する。

[イメージ]メニューから [サイズ変更] → [画像解像度] に進み、ドキュメントサイズを指定する。サイズは実際掲載するサイズ、画像解像度は印刷物では 350dpi が妥当である。

この時、目的に対し画像サイズや解像度が大きすぎると、かえって印刷時に調子が潰れてしまうことがあるため、面倒でも実際掲載するサイズに調整することが必要である。

その後、モードを 8bit にし、TIFF ファイルで保存する。ここで 8bit とするのは家庭用プリンターでは 16bit 対応が進んでいるものの、業務用プリンターではまだ 16bit 未対応のものが多く、印刷物にノイズ・モアレが発生することがあるからだ。Photoshop のデータは調整過程の記録としてレイヤーを統合せずにそのまま保存しておくとよい。

おわりに



完成したモノクロ画像

以上、デジタル画像の登録調査報告書掲載のために必要な処理について述べてきた。

近年のデジタルカメラの高機能化（高感度・高解像度）に伴い、撮影データの処理についても精密さを求めてきている。

地方公共団体の埋蔵文化財行政という立場では、高機能な環境での高度な画像処理は望むべくもないが、記録保存の主たる媒体として、できうる限り適切な処理を心がけたい。

研究余話Ⅲ 近世富山城下町出土の動物遺存体

—2006年度、2008年度調査出土資料の紹介—

納屋内高史（埋蔵文化財センター嘱託学芸員）

はじめに

ここで紹介する資料は、2006年度及び2008年度に調査された、近世富山城下町跡から出土した動物遺存体である。資料が出土した調査地点は、両年度ともに、武家屋敷地と町人地の境界付近に当たる。北側の武家屋敷と南側の町人地を隔てる背割下水が検出されているほか、多数の土坑や溝が検出されている。

出土した資料は、その多くが背割下水と塵穴と思われる土坑から出土しており、時期は概ね近世から近代初期と考えられる。資料は、全て目視により取り上げられたものである。また、2008年度調査出土資料の一部はパリノ・サーヴェイによって分析され、その結果、イワガキ、ニワトリ、イヌの出土が報告されている（パリノ・サーヴェイ2010）。

今回、未報告資料の分析を行った結果、総点数34点の動物遺存体が見つかり、このうち、29点を同定することができた。これまでに報告された種類の他に、新たにハマグリ、クロダイ属、カモ科、ニホンジカ、イルカ類の出土が確認された。

以下、今回新たに見つかった資料の詳細を述べる。

1 分類群ごとの記載

貝類

カキ類：イワガキ(*Crassostrea gigas*)の右殻が2点同定された。2点とも2008年度調査区SK82から出土している。また、属以下の分類群の不明なカキ類の殻が、2008年度調査区SD001（背割下水）とSK103から2点出土している。マガキと比較して著しく楕皮状を呈する殻の状態から、おそらくイワガキのものと思われるが、殻頂部を欠損するため、詳細な同定は避けた。

ハマグリ(*Meretrix lusoria*)：左殻が1点同定された。2008年度調査区SD001（背割下水）から出土している。復縁部が欠損しているが、殻長60~70mm前後の個体のものと思われる。

魚類

クロダイ属(*Acanthopagrus* sp.)：主鰓蓋骨(右)が1点同定された。2006年度調査区SK24から出土している。

鳥類

カモ科(*Anatidae* gen. et sp.indet.)：上腕骨(左)が1点同定された。2008年度調査区SK36から出土している。比較的小型のカモ科のものであり、江田(2005)の基準に照らし合わせるとマガモ属に近い特徴を持つ。

哺乳類

イヌ(*Canis lupus familiaris*)：大腿骨(右)が2点同定された。2006年度調査区包含層から1点、2008年度調査区SD08幅方から1点出土している。2点とも両骨端が適合しており、成犬のものである。



図：調査地点の位置 (1/12500)

資料の計測値から、西中川等の体高推定式に基づき、体高を推定したところ、2点とも体高52~53cm程度の個体のものと推定された。これは現在の犬種と比較すると紀州犬や四国犬と同程度の大きさである。

ニホンジカ(Cervus nippon)： 角及び左の踵骨、距骨、足根骨が1点ずつ同定された。角は背割下水上層から、距骨、踵骨、足根骨は2006年度調査区SK10から出土している。出土した角については、角の第2分岐または第3分岐から上の先端部である。角の長軸に直行する方向から人為的に切断されており、また、切断面から角の長軸に平行する切れ込みが入っている。切断面、切れ込みとも、傷の側面に、平行する線条痕が見られること、切断面の切り残し部分、及び切れ込みの底部が平滑であることから、資料の切断、及び切れ込みの形成は锯によって行われたと考えられる。また、出土した距骨、踵骨、足根骨は、全て左側のものであること、同一遺構から出土していること、各資料の関節どうしがよくフィットすることから、同一個体に由来するものと考えられる。

表：出土動物遺存体同定表

調査 年度	地区	遺構等	種別	種名	部位	部位	位置	破片	計測値	備考
2006年度	A-1	SK24	硬骨魚類	クロダイ属	主椎骨			R	1 開閉部幅7.90	
2006年度	A-1	包含層 G3	哺乳類	イス	大脛骨		完形	L	GL:180.00,Dy:-3 47.5,Bd:30.50	両骨端縫合 個体背面側位に長軸直行する 複数切り カットマーク有り
2006年度	C-2	SD006 西側断面	哺乳類	イス	大脛骨		完形	L	GL:183.00,Dy:-9 50.5,Bd:35.00	両骨端縫合
2006年度	A-2	石組上層	哺乳類	ニホンジカ	角				1	角上面に切断、切断面粗面。切断面側面に擦 状痕有り。ノコギリにより切断と考えられる。骨 角摩擦跡有り。
2006年度	C-2	SK10	哺乳類	ニホンジカ	踵骨		完形	L	GL:100.35,GB:31	
2006年度	C-2	SK10	哺乳類	ニホンジカ	距骨		完形	L	GL:48.30,GLac: 42.50,Bd:28.15	上記踵骨と同一個体
2006年度	C-2	SK10	哺乳類	ニホンジカ	足根骨	立方骨状骨	完形	L		上記踵骨と同一個体
2006年度	A-2	トレンチ内	哺乳類	クジラ目	椎骨	胸椎	椎弓		1	イルカ類 前面、両側面、椎弓板を鋭利な刃 物により切断(おそらく打撃)
2006年度	A-2	トレンチ内	哺乳類	クジラ目	椎骨	胸椎	椎弓		1	イルカ類 前面、両側面、椎弓板を鋭利な刃 物により切断(おそらく打撃)
2006年度	A-2	トレンチ内	哺乳類	クジラ目	椎骨	胸椎	椎弓		1	イルカ類 前面、両側面、椎弓板を鋭利な刃 物により切断(おそらく打撃)
2006年度	A-2	トレンチ内	哺乳類	クジラ目	肋骨	肋骨突起			1	イルカ類 肋弓本体との境界で切断
2006年度	A-2	トレンチ内	哺乳類	クジラ目	肋骨	肋骨突起			1	イルカ類 肋弓本体、輪突起上面を鋭利な刃物 により切断(おそらく打撃)
2006年度	A-2	トレンチ内	哺乳類	クジラ目	肋骨	肋骨突起			1	イルカ類 肋弓本体、輪突起上面を鋭利な刃物 により切断(おそらく打撃)
2006年度	A-2	トレンチ内	哺乳類	クジラ目	肋骨	近位端		R	1	イルカ類 近位端端部で切断。鋭利な刃物に よる
2006年度	A-2	トレンチ内	哺乳類	クジラ目	肋骨	近位端~ 骨幹部		R	1	イルカ類 近位端端部で切断。鋭利な刃物に よる
2006年度	A-2	トレンチ内	哺乳類	クジラ目	肋骨	近位端~ 骨幹部		R	1	イルカ類 近位端端部で切断。鋭利な刃物に よる。内部面に長軸直行方向のカットマーク有 り
2006年度	A-2	トレンチ内	哺乳類	クジラ目	肋骨	近位端~ 骨幹部		R	1	イルカ類 近位端端部で切断。鋭利な刃物に よる。内部面に長軸直行方向のカットマーク有 り骨幹部で切断?
2006年度	A-2	トレンチ内	哺乳類	クジラ目	肋骨	近位端~ 骨幹部		R	1	イルカ類
2006年度	A-2	トレンチ内	哺乳類	クジラ目	肋骨	近位部		L	1	イルカ類 近位端端部切断
2006年度	A-2	トレンチ内	哺乳類	クジラ目	肋骨	近位部		L	1	イルカ類 近位端端部切断
2006年度	A-2	トレンチ内	哺乳類	クジラ目	肋骨	近位部		L	1	イルカ類 近位端端部と骨幹部切断
2006年度	A-2	トレンチ内	哺乳類	クジラ目	肋骨	近位部?	肋骨突起		1	イルカ類 椎骨との境界面で切断
2006年度	A-2	トレンチ内	哺乳類	クジラ目	肋骨	近位部?	肋骨突起		1	イルカ類 椎骨との境界面で切断
2006年度	A-2	トレンチ内	哺乳類	クジラ目	椎骨	腰椎?			1	イルカ類 椎骨とその椎突起部端部(長軸平行切 断)。椎骨側切削面に穿孔(?)の痕痕の可能性 有り。
2006年度	A-2	トレンチ内	哺乳類	クジラ目	椎骨	腰椎?	肋骨突起		1	イルカ類 椎骨とその椎突起部端部(長軸平行切 断)。椎骨側切削面に穿孔(?)の痕痕の可能性 有り。
2008年度	F2	SD001B 西側断面	貝類	カキ類	鰓			R	1	
2008年度	F2	SK103	貝類	カキ類	鰓				1	
2008年度	G2	SK002	貝類	イワガキ	鰓			R	1 頭長:52.45,鰓 R 1 頭長:56.80,鰓	
2008年度	G2	SK002	貝類	イワガキ	鰓			R	1 頭長:58.80,鰓	
2008年度	F2	SD001D下層	貝類	ハマグリ	鰓			L	1 頭長:(58.80),鰓	
2008年度	F2	SK036	鳥類	カモノハシ	上腕骨	近位部	L	1	マガモ属に属する	

ケジラ目の一種(イルカ類)(Cetace fam. gen. et sp. indet.): 椎骨及び肋骨が計 16 点同定された。全て 2006 年度調査区にもうけられたトレンチ内からの出土であり、重複する部位が見られないことから、同一個体に由来する可能性が高い。資料の大きさから、おそらくマイルカやカマイルカなどの小型のイルカ類のものと考えられる。椎骨は 8 点が出土しており、その内訳は胸椎 4 点、腰椎? 3 点、胸椎または腰椎 1 点である。全て椎弓または肋骨突起のみの状態で出土しており、椎体部分の出土は見られない。また、全ての資料に切断痕が見られ、椎弓については、ほとんどの資料で肋骨突起及び椎体との接続部分が鋭利な刃物により切断されているほか、前面が切断されているものも見られる。肋骨は 8 点出土しており、その内訳は右側 5 点、左側 3 点である。ほとんどの資料が、近位端端部を鋭利な刃物により切断されている。

2 察

今回、新たに同定された動物遺存体は、総点数 29 点にのぼる。これらの資料は、そのほとんどが、食糧資源や、製品の素材として利用されたと考えて差し支えなく、その多くが、塵穴と考えられる土坑や背削下水の中から出土していることから、食糧資源や製品の素材として利用された後、廃棄されたものと考えられる。

同定された動物遺存体を出土地点ごとに見てゆくと、2006 年度調査地点出土資料については、背削下水上層、SK10 からニホンジカとイヌ、SK24 からクロダイ属、トレンチ内からイルカ類、包含層からイヌが出土している。この中でも特に注目されるのは、背削下水上層出土のニホンジカの角とトレンチ内から出土したイルカ類である。

背削下水上層出土のニホンジカの角については、鋸による加工痕が見られた。加工痕の位置や形状に特定の形を作出しようとする意図は読み取れず、おそらく角から製品用の部材を切り取った後の廃材と考えられる。本地点の背削下水からは、これまでに鉄滓の集中層が検出されており、付近で小規模な鍛冶が行われていたことが想定されている。今回新たに見つかった廃材と考えられる角の存在は、本地点付近で鍛冶だけでなく、骨角製品の製作も行われていたことを示唆する。

トレンチ内から出土したイルカ類については、出土したほぼ全ての資料に人為的な切断痕が見られた。出土した部位が、道具の部材としてあまり有用でない椎骨、肋骨のみであり、また、出土した全ての資料が、一個体に由来する可能性が高く、生体時に互いに關節する部分が切断された状態で出土していることから、本地点付近で何らかの切り分け行為を行った際についたものと考えられる。

イルカ類の切断痕を更に詳しく観察すると、出土した資料は、椎骨と椎骨の間で分離されると、左右側の胸椎肋骨突起から肋骨近位端にかけて切断することにより、3 枚おろしに近い形で肋骨を外されていること、椎弓部分を水平に切断していることが読み取れる。また、本遺跡から出土した椎骨は椎弓部分のみであり、通常遺跡からよく出土する椎体部分は見られない。このことは、椎体部分が分離され、何らかの用途に用いられた後、別の場所に廃棄されたことを示す。

これらのことから、本遺跡出土のイルカ類は肉から骨に至るまで、徹底的な利用が行われていたと考えられる。イルカ類を食料としてのみ利用していたのならば、ここまで徹底的な利用を行う必要性は考えがたく、食肉としての利用だけでなく、油の採取など食用以外の利用も行われていたことを考慮に入れる必要がある。

以上に述べたことから、本調査地点付近では骨角製品製作やイルカ類の食用以外での利用など、鍛冶意外にも様々な生産活動が行われていたことが考えられる。

次に 2008 年度調査地点では、SK036 からカモ科、SD001 からハマグリとカキ類、SK82 からイワガキ、SK103 からカキ類が出土している。2008 年度調査地点出土資料については、一部がパリノ・サーヴェイにより報告されている。それによれば、SD001 からニワトリとイヌ、SK011、SK82 からイワガキの出土が報告されている。今回の分析結果と比較すると、今回の分析では新たに SD001 からハマグリ、SK036 からカモ科の出土が確認され、本調査地点における動物利用の実体がより明らかになったと言えるだ

ろう。また、本地点から出土したイワガキについては、今回、及びパリノ・サーヴェイ分析資料とともに右殻に偏る傾向が見られる。イワガキを含むカキ類の殻は、左殻がくぼみ、右殻が扁平になると特徴があるが、左右の殻の強度にそれほど大きな差ではなく、土中に埋没した場合に右殻が残りやすいという傾向はない。むしろ左殻のほうがくぼんで大型化する分、発見されやすい。そのため、本地点のイワガキの出土傾向は、左殻と右殻を別々の場所に廃棄していたことを示し、当時の利用、廃棄のあり方を反映していると言える。カキ類は左殻がくぼむという形態上の特徴から、賞味する際などに左殻を器代わりに用いることがあるが、本遺跡の出土傾向はそういう利用のあり方が反映されていることも考えられるだろう。

おわりに

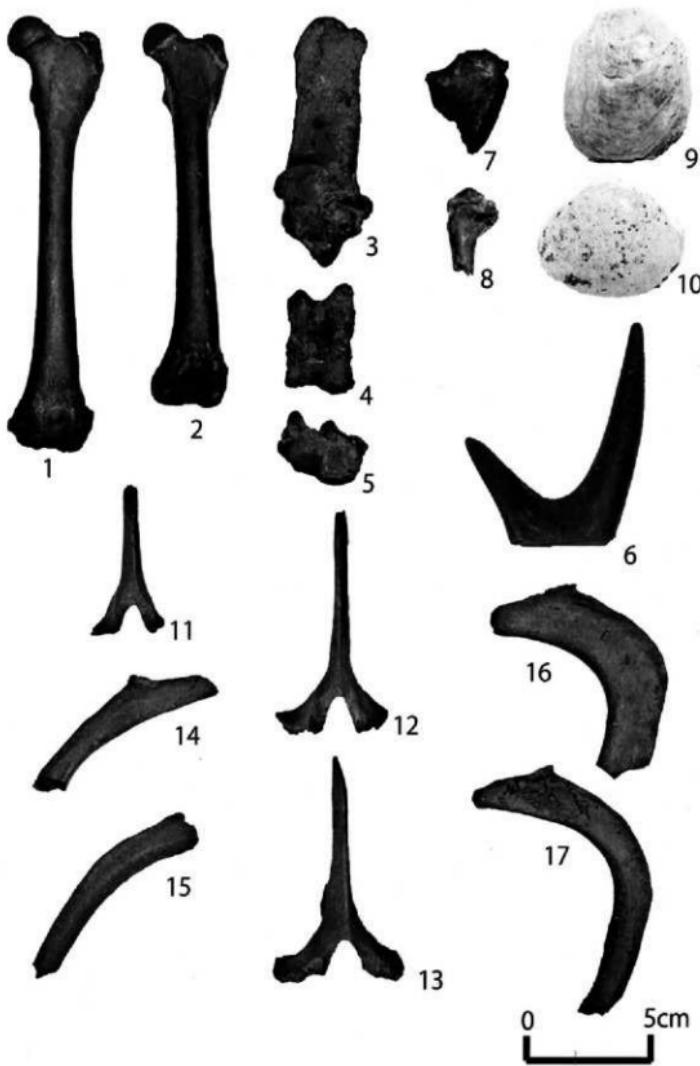
以上、近世富山城下町跡出土動物遺存体について、未報告資料の紹介を行うとともに、若干の考察を行った。今回の分析により、2006年度調査地点については、鍛冶以外にも様々な生産活動が行われていたことが考えられた。また、2008年度調査地点については、新たに2種類を同定することができ、本地点における動物利用の実態をより明らかにすることができた。今後は、文献資料や絵図との対比、及び他遺跡との比較を行い、出土した資料の持つ意味や出土した地点の位置づけを考えてゆくことが必要である。

注

同定表中の計測値は、Driesch(1976)に基づき、計測を行った値である。

引用・参考文献

- 江田真穂 2005 「生活復原資料としての鳥類遺体の研究－カモ亜科遺体の同定とその考古学的意義『海と考古学』六一書房
- 西中川駿他 2008 「イヌの骨計測値から骨長並びに体高の推定法」『動物考古学』25, 動物考古学研究会
富山市教育委員会 2006 『富山城跡発掘調査報告書－総曲輪通り南地区第一種市街地再開発事業に伴う
富山城城下町の発掘調査報告』
- 富山市教育委員会 2010 『富山城跡発掘調査報告書－総曲輪四丁目・旅籠町地区優良建築物等整備事業
に伴う富山城城下町の発掘調査報告』
- パリノ・サーヴェイ 2010 「第IV章 理化学分析」『富山城跡発掘調査報告書－総曲輪四丁目・旅籠町
地区優良建築物等整備事業に伴う富山城城下町の発掘調査報告』富山市埋蔵文化財調査報告 39, 富山市教育
委員会埋蔵文化財センター
- Driesch, Angela Von Den 1976 *A guide to the measurement of animal bones from archaeological sites. Peabody Museum Bulletins I*, Peabody Museum Press, Cambridge



写真：出土動物遺存体

- 1・2:イヌ大腿骨(左),3:ニホンジカ踵骨(左),4:ニホンジカ距骨(左),5:ニホンジカ足根骨(左),6:ニホンジカ角,7:クロダイ属主鰓蓋骨(右),8:カモ科上腕骨(左),9:イワガキ右歯,10:ハマグリ左殻,11~13 クジラ目椎骨(胸椎),14・15:クジラ目肋骨(左),16・17:クジラ目肋骨(右)

鹿島昌也(埋蔵文化財センター主査学芸員)
松山充宏(越中史壇会会員)

はじめに

寺島館跡は射水平野東端の旧神通川左岸段丘上に位置する城館跡である。平成22年度の発掘調査で堀や土橋など城館の存在を推測される遺構が発掘された。本調査地は埋蔵文化財包蔵地「今市遺跡」内に位置するが調査を受けて平成23年、今市遺跡の包蔵地内に新たに「寺島館跡」を設けた。

跡跡がみつかった「寺島」は平凡社『富山県の地名』によると「かつて神通川に囲まれて島となっていたこと、また布木村真福寺の寺地であったことに由来する」とある。また守護代神保氏の被官であった国人寺島氏の出自の地とも推測されている。

中世の越中史に登場する「寺島」について、発掘調査を機にその地名の由来やこの地で見つかった館跡の位置付けに迫ってみた。第1、2節では、発掘調査からみた寺島館跡の堀の変遷や旧地割り図との検討を鹿島が行い、第3、4節では、文献史料からみた寺島の地名と呼称について松山が検討を試みた。

1 発掘調査からの検討

発掘調査では、東西方向に延びる堀跡が14.2m分検出され、I～III期の変遷を確認することができた。I期は幅3.6～4.0m、深さ2mの断面U字形を呈する。堀底は砂質で水を湛えていた堀ではなく空堀であった可能性が高い。II期は幅3.4m～4.0m、深さ1.8mを測る。断面形はV字形の薬研堀（角度は北法面が緩やかで南法面が急な片薬研堀）を呈し、堀の途中に土橋及び南法面途中に犬走りとみられる幅0.6mの段が設けられていた。III期は幅3.0～3.5m、深さ1.0mと縮小する。II期で造られた土橋を切って堀が掘られていた。堀の覆土中から出土した珠洲焼や中世土師器から12世紀後半から13世紀にかけて機能していた。II期の堀からの出土量が多い傾向がある。

このII期の片薬研堀・土橋・犬走りなど中世城館に伴う遺構は、鎌倉時代前期に遡り、県内でも早い時期に形成された。

類例として、時期は下るが14世紀に営まれた南砺市（旧福野町）寺家新屋敷跡が挙げられる。78m×63mの方形に巡る堀の内側には土塁が形成され、東西に虎口を設け、その間を結び南側の堀には屋敷地と反対の法面に犬走りを設けている。「三州地理誌稿」に南北朝の一時期、越中国守護となつ桃井直常の臣家で田中権左衛門貞行の居館となり、その可能性が高い館跡である。

一方、岐阜県飛騨市（旧神岡町）江馬氏城館跡では、下館西堀に箱堀と薬研堀及び土橋2箇所が検出された。薬研堀は3mもの深いV字形の堀を掘削後、程なくして館側が緩やかな片薬研となる。館が機能していた時期の大部分はこの形状であったと推測されている。この堀の館側に土塁があったとみられ、その築造年代は14世紀後半から15世紀前半と推測されている。

上記の2事例を参考に寺島館跡をみると、犬走りが堀の北側に付随することから、寺家新屋敷例から館の中心は堀の南側に存在したことになる。その一方、江馬氏城館では、堀が片薬研となった際に館のあった側の堀の斜面が緩やかになる。寺島館跡に当てはめると堀の北側が緩やかな片薬研となり、堀の北側に館があったことになる。よって寺島館跡では、堀の南及び北いずれの側にも館があった可能性が推測される。このことから、II期の堀に土橋・犬走りが形成された時期には、推測の域を出ないが、堀の南と北双方に郭状の屋敷地が形成され、それらが土橋で繋がっていたと考えたい。現地をみた中世城館に詳しい高岡徹氏によると、片薬研堀は防御的な意味合いから館側を急な斜面にしたとの指摘を受けた。よって、寺島館跡での主郭となる部分は堀の南側に形成され、北側は副郭としての機能を推定したい。今後、同時期の同様な遺構の類例の増加を待ってさらに検討を加えていきたい。

調査地が位置する射水平野東部は、鎌倉時代には京都下鴨神社領「倉垣莊」が設立され、射水市下村加茂神社はその総社とされる。その北側には下村加茂遺跡が発掘され、初現は13世紀で14世紀前半には廃絶する。この段階には7つの館跡・屋敷地が確認されている。同時期の有力者の館跡あるいは弘仁年間創建とされる真言宗福王寺が近隣に所在し、屋敷地は寺院である可能性も指摘さ

れている。

さらに、神通川やその支流の井田川流域に富山市小倉中稻跡遺跡や同市任海官田跡に12世紀後半～13世紀の集落が出現する。これらは徳大寺家領莊園「宮河莊」との関連が指摘されている。

このように、中世前期に位置付けられる集落や居館は当該期に設立された莊園との関連で説明されることが多い。しかし、先述した江馬氏館跡西堀の深いV字形の薦研堀を程なく片薦研として作り直し、館が機能していた大半の時期をこの片薦研堀で使用していることや寺島館跡では時間を見かずしてII期の土橋を設け、片薦研堀を作り変えられたとみられることから、I期からII期の堀の作り替えは、片薦研堀を形成するに際して一旦U字形に掘り上げた後、すぐに土橋、犬走りを備えた片薦研堀を形成した過程を示していたと考えたい。

2 旧地割図などからの検討

発掘調査地が位置する寺島地区は呉羽丘陵北端の東西を神通川の旧河道に挟まれた中洲状の地形に立地する。その中でも発掘調査地点は、法務局が所有する旧地割図でみると「高田」という字名に位置する。旧河道の中洲状に残る地形の微高地に城館が営まれていたことが推測される。しかしながら、寺島地内には城館の存在に繋がるような字名は残っていない。その一方で旧地割をみると調査地を含む水路や道で囲まれた東西60m、南北100mの範囲が発掘された堀跡の方向とも一致する東西方向の区割りがみられることなどから、この範囲に発掘された堀跡に関連する何らかの施設の存在を想起させる。よって、この範囲を「寺島館跡」と呼称するものとする。

この寺島館跡から、旧河道を下ると中世岩瀬湊が推定されている、四方や西岩瀬に至る。また、後に「浜街道」と呼ばれた東西に延びる海岸沿いには、打出遺跡が所在し、旧河道の自然堤防上には古代道路遺構が検出されている。「越中旧事記」では打出は宿駅として栄えていたことが伝わる。発掘調査では、13世紀～14世紀に中世の集落の初現が認められる。このような街道と河川交通が交わる要衝の地を間近に控え、富山平野や射水平野を一望できる場所ゆえ、早くから有力者によって居館が営まれたのだろう。

3 寺島地名の初見と寒江莊

寺島村は中世において婦負郡に属していたとみられる。寺島地名の初見は明応8年（1499）に作成された次の文書による。

定 永代沽却渡申道者の事

越中國在所ハ、おふし津、明神、つはたへ、てらしま、山田やしき 今龍分一ゑん

右、依有急用之子細、直銭伍貫文に、中郷かまやさ衛門二郎殿江、今龍ひやへ殿沽渡之處、
実正明白也、若天下一同之儀候者、此沽券至ハ不可有違乱煩者也、仍後日状、如件、

明応八年 つちのとのとし 十二月十八日 内助太郎

今龍ひやへ (花押)

口入者々助七

（「伊勢神宮緝古帖」）

この文書は、伊勢神宮の崇敬者である道者の所管権を神宮御師が売却した証文である。明応期に寺島へ伊勢信仰の流入が確認でき、現在も寺島地区には伊勢系の神明社が勧請されている。

寺島村に隣接して西には八町村がある。八町村は中世において寒江莊の範囲であった。

寒江莊は、賀茂御祖神社（京都市左京区・下鴨神社）の社務（神主の上首）を勤めた梨木家が戦国時代まで知行した地であり、西に位置した同社領射水郡倉垣莊と一体化した支配が行われていた。

寒江莊の領主である賀茂御祖神社は、賀茂別雷神社（京都市北区・上賀茂神社）と並んで京都の市街地を流れる鴨川の神とされている。賀茂御祖神社には賀茂建角身命とその娘である玉依姫命の2座、賀茂別雷神社には玉依姫命の子である賀茂別雷命1座が祭られる。この3座を総称して賀茂神と称し、水と雷の神という性格を有する。

特に賀茂神は、平安京遷都以後は殊に皇室の産土神として、皇室の祖神である伊勢神宮（三重県）とともに重視された。

平安時代、旧暦の夏に天皇は賀茂神に祈謝する宣命を携えた勅使を下鴨神社・上賀茂神社へ遣し、幣帛を奉る儀式が行われた。内裏から下鴨神社・上賀茂神社へ参向する勅使の行列が、今も初夏の京都を彩る葵祭の起源である。

しかし、平安後期になると下鴨神社・上賀茂神社の経営基盤が揺らいだらしく、寛治4年（1090）7月、朝廷は下鴨神社・上賀茂神社へ全国で600町にのぼる莊園を寄進した。そのひとつが越中国射水郡倉垣莊であった。神社への恒常収入を産する倉垣莊の管理は、下鴨神社において社務が担うこととなった。

倉垣莊の庄家（莊園管理のための役所）は下村加茂神社（射水市加茂中部）周辺に位置したと見られ、神社境内に隣接する加茂遺跡で鎌倉時代の居館跡が出土している。また下村加茂神社には下鴨神社で葵祭に伴って行われる御蔭祭・流鏑馬などを移入した加茂祭（やんさんま）をはじめ、莊園の勧農・貢納儀礼の名残である御田植祭・鱒分け神事が残されている（松山2009B）ことからも、主たる代官の居住地として想定してよい。

鎌倉期以後、下鴨社の社務であった梨木家は、倉垣莊を基盤に、隣接する婦負郡で鎌倉期までに私領を形成した。これが寒江莊の起源とされている。

4 寺島の呼称

寒江莊は3村で構成されていたといい、唯一村名が分かれる八町のほか、針原（八ヶ山・長岡）・北代周辺がその範囲と推定されている。そして、寒江莊にも賀茂神が勧請されている形跡がある。それは北代加茂社であり、下鴨神社や下村加茂神社と同じく、流鏑馬を行うための馬場になぞらえた直線道路が今も残されている。

室町時代以後、寒江莊は守護畠山氏の被官らが下鴨神社から代官を請け負って管理を行う代官請が実施された。しかし、代官らはなかなか下鴨神社と契約した年貢を納入しなかったため、下鴨神社は朝廷や幕府へ訴えを起こしている。次に掲げるのは長禄2年（1458）下鴨神社が寒江莊に関して起こした訴訟の訴状である。

鴨社前禱宜三位種謹言上

欲早任度々御書、被加御成敗、今月土用中恒例夏季御神樂御祈拂遂無為節、料所越中国寒江莊代官人等背請文旨、彼下行要脚月宛、闕怠無勿体子細条々

副進一卷 鷹苑院殿御代守護方渡状、康正二年直務御奉書并月宛未進註文等

一 於寒江莊内三箇村寺分等者、自去嘉吉年中、為營田參河入道代官請文明鏡之處、神役毎度無沙汰、役役人夫代年、押妨之、未進過分之間、神用依闕乏、去享德三年仁申請御奉書、致直務、御祈拂神事無為之處、去々年九月、令強入部、毎月地下沙汰分年貢悉押取之、不社納之段、就達 上聞、康正元年十二月仁重而被成直務御奉書、於押妨分者、可社納之、至当庄者、可渡付社家代之由、度々雖被仰出、兩條終以依不事行之間、去年六月、公方様別面御祈拂時分、被仰付斎藤四郎右衛門尉、同遠江入道、可避渡之旨、連々雖有御成敗、同篇之間、六月中御神樂既令闕怠訖、御祈拂愈転所驚存也、然仁当年又、彼要脚以下、干今就無沙汰、仰御成敗事、
(中略)

右彼両三人不恐神慮、不慮 上裁、背請文之旨、依為未進過分、御祈拂神事怠転、言語道斯之次第也、被召下各避状、未進分事速被加御成敗、令社納、專神事、弥為奉祈御長久、粗謹言上如件、

長禄武年六月 日

(「賀茂御祖皇太神宮諸國神戸記」卷七)

この訴状の中に、「寒江莊三箇村寺分」と呼ばれる場所があったことが分かる。神役を課されたと

あるから、この寺は莊園の安泰を祈った現地寺院を指すのであろう。ちなみに北代加茂社の別当は北代極楽寺（廃寺）とみられ、同寺は賀茂の神紋である葵紋を用いていたと伝えられる。神社と別当寺が同じ紋を使うのは放生津八幡宮と曼陀羅寺、下村賀茂神社と福王寺など近隣で多くみられる事例である（松山2009A）。

久保尚文の研究によって、もともと寒江莊は梨木家に対する寄進の結果成立した莊園であるため、旧来からの寺社が多く存在し、賀茂系寺の勧請創建が進まなかったことが明らかとなっている（久保2008）。そのため、この寺分は三箇村の新開地にそれぞれ少しづつ設けられた可能性がある。

「寺分」の字だけで判断するのは早計かもしれないが、寺島は寒江莊のうち八町村の東端に位置し、旧神通川にも面していた。島地名は、河川の出水時に水没しない場所などを指す高台を意味する。そのため、八町村の寺分に相当する島という意味で、「寺島」という地名が生まれたのではないかと推測する。実際に、寺島は布目村にある真福院（真言宗）の寺領とする伝説もあるが、同院と神宮寺関係を結ぶ万見八幡宮との位置関係を見るとこの伝承に疑問が残る（久保2008）。

こうした前提を踏まえれば、（仮）寺島館の主の父祖は、寒江莊の知行に関わる国人であったと見ることができ、この地名を苗字とする寺島氏へ系譜が連なっていく可能性が現れるのである。

おわりに

鎌倉期に成立した「倉垣莊」の現地支配に携わった下司・代官らは開拓に努め、新しい耕地や集落を整備していった。その一方、寺島地区周辺は古代射水郡寒江郷として既に開墾が始まっていた。寺島館跡で発掘された堀の南側では、平安時代（9～10世紀前半）の堅穴住居跡もみつかっており、在來の古代集落を背景に居館が成立したと推測される。中世の「寒江莊」は社家の私領として成立了。このような賀茂系寺勢力の動向と在地勢力との関係が寺島地区に堀や犬走り、土橋を有する居館を成立させた背景の一つとも考えられる。

寺島館跡が機能していた12世紀後半から13世紀（平安時代末～鎌倉時代前期）は平氏政権から源平の争乱を経て源氏政権へと時代が移り変わり、越中国内でも多くの在地領主や国人とよばれた越中武士団が誕生し、活躍した。後の室町期に国人寺島氏を輩出した可能性のあるこの地には、その嚆矢となる勢力がここを拠点としていたことが推測される。寺島館の主は、どのような経過を経て寒江莊の知行に関わる国人へとなっていたのか、今回検証した「寺島」の地がどのように越中世史に関わっていたのか、さらに解明されていくことを期待したい。

引用・参考文献

- 神岡町教育委員会 富山大学人文学部考古学研究室 1995 『江馬氏城館跡』
- 久保尚文 2008 『越中富山 山野川渓の中世史』 桂書房
- 下村 1986 『下村史』
- 下村教育委員会 1999 『富山県射水郡下村 下村加茂遺跡発掘調査報告』
- 富山県 1975 『富山県史 史料編II 中世』 富山県
- 富山県福野町教育委員会 1988 『寺家新屋敷館跡』
- 富山県福野町教育委員会 1989 『寺家新屋敷館跡II』
- 富山市教育委員会 2011 『富山市内遺跡発掘調査概要V—砂川カタダ遺跡・今市遺跡—』
- 富山市教育委員会 2004 『富山市打出遺跡発掘調査報告書』
- 平凡社地方資料センター 1994 『富山県の地名』
- 松山充宏 2009A 「宗教装置が構築する景観—越中に移入された洛北」『富山史壇 第160号』
- 越中史壇会
- 松山充宏 2009B 「水と雷の神さま—とやまの賀茂信仰」『祭りと信仰からみた日本海文化II』
- 富山市日本海文化研究所

研究余話V 近世富山町石工について

古川 知明（埋蔵文化財センター所長）

1はじめに

近世期富山城下町における石造物製作は、いわゆる町石工が行った。富山町のどこにどのような石工が存在し、どのような石造物を製作していたのかは、資料が多く不明な点が多い。

本稿では、近世富山町における石工の製作状況についての概要を把握することを目的とする。

2研究史

京田良志氏ほかによる富山市内石仏調査では、富山市街地南東部の辰巳町で、文政10(1827)年「石工 喜兵衛」の丸彫地蔵1体が確認された〔富山市教委1983〕。

このほか史資料に富山町石工に関する記録は見当たらない。

3富山町石工の個別資料（表1）

近世期において石造物に石工名が見える富山町石工は7人がいる。複数石造物に銘が確認できるのは1人のみで、その他6人は1基のみである。

(1) 見上兵右衛門

文政3年富山市中野新町白山社境内の狛犬一対を製作した（写真1～4）。安山岩製。蹲踞の姿勢で、やや猫背となる。顔の特徴は、太い眉・目玉に瞳を描く・横耳・大きな团子鼻・顎両脇に渦巻の瘤形彫・二重に縁取った口等がある。顔は正面からわざわざに外に向く。尾は团扇形で中央の大い尾が独立して立つ。台座は、隅角を丸く加工し、正面の1面のみ楕円形に縁取りし、波瀬文を浮彫する。

基礎は長方体の切石2石を横置きし、正面に「奉納」と楷書で陰刻する。その他の3面には町名・寄進者名・年号・「石工/富山住/見上兵右衛門」の陰刻がある。基壇は欠失している。兵右衛門の工房所在地は不明である。

(2) 喜兵衛

文政10年富山市辰巳町の丸彫地蔵を製作した〔富山市教委1983〕。現地調査の結果、台座は新調され失われていたため銘は確認できなかった。本体は蓮弁一体となっており、蓮弁には弁脈が表現される。間弁は幅広縁帶である。喜兵衛の工房所在地は不明である。

(3) 林田喜助

天保10(1839)年から明治5(18)年までの間に4基を製作した。その内訳は石仏1基、石塔2基、石碑1基である。

天保10年富山市利波の自然石石仏（写真5～6）は、安山岩の自然石を舟形に粗いノミ加工で整

表1 富山町石工在銘石造物一覧

番号	在銘年号	種別	形態	所在地	石工名	工房情報	石材	備考
1	文政3(1820)	狛犬		富山市中野新町	見上兵右衛門		安山岩	白山社境内
2	文政10(1827)	石仏	丸彫	富山市辰巳町	喜兵衛		安山岩	延命地蔵と呼ばれる。台座欠
3	天保10(1839)	石仏	自然石型	富山市利波	喜助（林田喜助）	太田口	安山岩	道標、法名刻銘
4	天保13(1842)	自然石碑	顎影碑	富山市五福	森田喜祐		安山岩	足立塚。移転。台座に石工銘
5	弘化3(1846)	石塔	地本名号塔	射水市白石	林田喜助	富山	花崗岩	阿弥陀寺入口
6	元治元(1864)	墓碑	柳形墓碑	富山市五番町	三上与三郎		安山岩	光嚴寺・佐久間家墓地
7	慶応3(1867)	燈籠	四角型	富山市中野新町	喜助		安山岩	白山社境内
8	慶応4(1868)	自然石碑	名号塔	富山市中町萩島	喜助（林田喜助）	富山	沖浦崎砂岩	
9	不明	石碑台座	不明	富山市五福	小沢平吉	富山住人	角田安山岩	足立塚横。「報恩塔」正面刻銘。旧地不明
10	明治5(1872)	石碑	自然石型	射水市新湊本町	喜助（林田喜助）	富山	安山岩	専念寺境内

形し、正面を舟形に彫り奥に2体の立像を浮彫りする。右の1体は螺髮で、与願印・施無畏印を結ぶ釈迦如来である。左は合掌姿の菩薩像で、聖觀音菩薩とみられる。釈迦の口がやや開き氣味であることが特徴である。像間上部には法名の刻銘がある。正面上部には右に「右 中神道」、同左に「左 大塚道」と刻銘があり、道標であったことがわかる。左側面に年号、「太田口／富山石工／喜助」と陰刻される。「太田口」は工房の所在地とみられ、城下町中央部の飛驒街道の起点（現在の富山市太田口通り）にある。

弘化3（1846）年射水市白石阿弥陀寺入口の名号塔（写真7～9）は、花崗岩製の方柱形の六字名号塔である。高さ6尺6寸（2.0m）、幅厚ともに10寸（30.3cm）である。「南無阿弥陀仏」は特徴的な文字で、名号の左下に「徳本④」とあり、いわゆる「徳本名号塔」に分類される。左側面に年号、右側面に「富山石工 林田喜助」と陰刻がある。

慶応4（1868）年富山市婦中町萩島の自然石の名号塔（写真10）は、神通峠産砂岩（古川2011B）の玉石を半裁し、半裁面に六字名号を陰刻したものである（注1）。この玉石は神通川河川敷で獲得可能な石材で、富山市や萩島集落は神通川河川敷に接しているので、容易に獲得できる石材である。

明治5年射水市新湊本町尊念寺境内の自然石の石碑（写真11～12）は、安山岩玉石の表面に尊念寺に關係した内容の文字を多款刻銘している。本体裏面に「富山石工喜助」と1行での刻銘がある。

（4）森田喜祐

天保13年富山市五福の「足立塚」石碑を製作した（写真13～14）。この石碑は、四心多久間見日流柔美で富山に伝えた足立平陸正保を顕彰し造立したもので、現在地（五福公園）に移転する前は、西に50mほど離れた丘陵裾に存在した。石碑本体は花崗岩自然石を用いており、河川玉石である。台座は安山岩玉石で、台座裏面に「石工 森田喜祐」と陰刻がある。喜祐の工房所在地は不明である。

（5）三上与三郎

元治元（1864）年富山市五番町光嚴寺墓地内に所在する佐久間家墓地の墓石を製作した（写真15～16）。光嚴寺墓地には富山藩諸家臣の墓があり、元治元年における佐久間氏は、「富城武鑑」（高瀬編 1987）によればアラ町（荒町）の佐久間東庵がおり、「丸ノ内達クカノ羽」の家紋であることが記載されている。おそらく小兒医である（注2）。墓石は櫛形で、正面を同じ櫛形に彫り下げ、「佐久間氏墓」と隸書体で陰刻する。正面上端には家紋の「丸に達クカノ羽」が浮彫れる。したがってこの墓石は東庵もしくは東庵に近い血縁者のものであろう。裏面下部に隸書体で「石工／三上与三郎」と陰刻されている。与三郎の工房所在地は不明である。安山岩製。

（6）儀兵衛

慶応3（1867）年富山市中野新町白山社境内の燈籠一対を製作した（写真17～18）。笠・火袋・中台・基礎など主要な構成部分が四角形であることから、「四角型」燈籠に分類される。また竿は断面四角形で、下開きとなる撥形竿の型式をもつ、いわゆる「神前形」燈籠に分類される（京田1970）。竿に年号と「石工 儀兵衛」の刻銘がある。

（7）小沢平吉

富山市五福の足立塚横に置かれた解体部材の一つに、石碑台座とみられる切石がある（写真19～20）。正面には楷書体で「報恩塔」の陰刻があり、上に乗っていた石碑は自然石であったと推定される。角閃石安山岩製。左側面に「富山住人／石工／小沢平吉」と陰刻がある。この石碑台座の旧地は不明である。

4 分布状況（図1）

富山市石工在銘品の分布は、富山町を中心に、半径1里（4km）以内に6基（60%）、半径2里以内には9基（90%）であり、ほぼ半径2里以内に流通したことがわかる。最も遠方は、射水の放生津であり、富山町から15.5km（4里弱）離れている。

石工別に見ると、半径1里以内に分布するのは、すべて林田喜助以外の石工で、これより遠方のものはすべて林田喜助製作品である。これを加味すれば、林田喜助以外の富山市石工は、半径1里以内に流通し、林田喜助はその流通範囲の外において流通したという状況と理解できる。

また、富山町地内において富山町石工製品は、城下町南東部の寺町エリアに集中しており、種類もバラエティに富む。

5 石材について（図2）

富山町石工が扱う石材は、花崗岩・安山岩・砂岩の3種類があり、安山岩が多い。花崗岩は早月川・常願寺川・神通川の河川転石が利用されているが、特定までは困難である。安山岩のうち角閃石安山岩は常願寺川産、その他の安山岩は常願寺川・神通川産があるが、大きさ等からみて、常願寺川河川転石が使用されたとみられる。砂岩は神通川上流部の神通峠産である。神通峠産砂岩は、飛驒市神岡町横山から富山市今生津にかけて飛驒街道近隣地の山地から入手が可能で、飛驒街道を通って富山町に運搬されたと推定できる。

石工別に見ると、林田喜助は種類により花崗岩・安山岩・砂岩を使い分けしており、それ以外の石工は、安山岩を使用した。

6 富山町石工の特徴

富山町石工の製品は、潜在的には多数存在することが予想されるが、石工名を刻銘するものは極少ない。同じ傾向は、富山町に接して流れ込む神通川上流の神通川石工についても認められる（古川2011b）。

富山町石工の製作品は、石仏・狛犬・燈籠・石碑・墓石と多岐にわたる。鳥居・社標については未見である。石材については富山町で調達可能な石材を主体としている。安山岩は、角閃石安山岩を主体としている常願寺川石工と同じ产地（常願寺川河川敷）で獲得していると見込まれるため、常願寺川石工とどう調整したかの解明が課題である。なお、富山町石工で常願寺川産角閃石安山岩を使用する石工は1名だけである。

7 富山町石工の系譜

現状で確認できる最古の富山町石工館は、文政3年見上兵右衛門である。兵右衛門の製作した狛犬の容姿・意匠は、近畿地方に分布する「京型・難波型」と呼ばれる狛犬型式と共に通じている（ねず1994）。したがって兵右衛門の製作技術の系譜は、直接近畿地方に求めることができ、兵右衛門は、近畿地方のいざれかにおいて石工修業をした後、富山に移住して石工を続けたことが考えられる。

近畿地方との関係を示すものに、富山市於保多町於保多神社の嘉永元（1848）年石鳥居がある。銘は「石工 大坂 いよや亥兵衛」とある。亥兵衛は大坂の石工であるが屋号は伊予屋なので伊予国（愛媛）出身者であろう。花崗岩製であるが富山産ではないので、大坂で製作し船で富山へ運んだと思われる。

また、この狛犬の台座には波濤文が浮彫りされている。この波濤文は、祥雲文とともにこの時期の



図1 富山町石工在銘品の分布状況

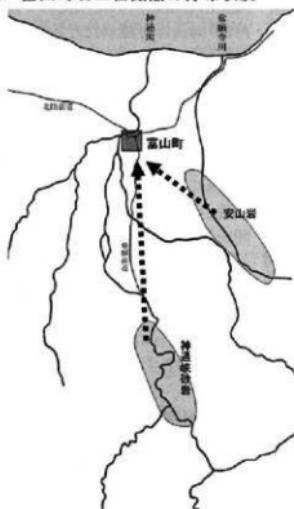


図2 富山町石工使用石材原产地と
運搬ルート



写真1 文政3年西中野白山社狛犬（阿形）



写真2 文政3年西中野白山社狛犬（阿形）



写真4 文政3年西中野白山社狛犬 基礎刻銘

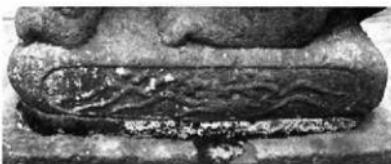


写真3 文政3年西中野白山社狛犬 台座



写真5 天保10年利波石仏



写真6 天保10年利波石仏 側面刻銘



写真 7 弘化 2 年射水市阿弥陀寺
德本名号塔



写真 8 弘化 2 年射水市阿弥陀寺
德本名号塔



写真 9 弘化 2 年射水市阿弥陀寺德本
名号塔 石工路



写真 10 康応 4 年萩島名号塔



写真 11 明治 5 年新湊専念寺石碑



写真 12 明治 5 年新湊専念
寺石碑 刻銘



写真 13 天保 13 年足立塚



写真 14 天保 13 年足立塚基礎裏面 石工銘



写真 15 元治元年富山市光嚴寺

佐久間家墓地墓石



写真 16 元治元年富山市光嚴寺

佐久間家墓地墓石 石工銘



写真 17 康応 3 年西中野白山社燈籠



写真 19 年不明報恩塔基礎



写真 20 年不明報恩塔基礎 石工銘

写真 18 康応 3 年西中野白山社
燈籠 石工銘

常願寺川石工が石仏石塔製作で多用する文様の一つであるが（古川 2011A）、狛犬台座に波瀬文を施した常願寺川石工製作狛犬例ではなく、明治期に至り、富山町石工の製作と推定される神通峠産砂岩製の狛犬において、台座ではなく基礎に波瀬文浮彫を施す例が若干認められる（注3）。台座に波瀬文の浮彫を彫る見上兵右衛門の様式は、その後継承されることとはなかったが、常願寺川石工とのつながりを連想させる要素であることを指摘し、今後の課題としておきたい。

8 おわりに

富山石工が石工館を入れる石造物は少なく、その実態はまだ十分明確にすることはできないが、数少ない例を観察することにより、その系譜を探る糸口が見出すことができた。富山町石工は、これ以後の明治に入ってから力量を発揮し、神通峠産砂岩を使用した狛犬を多数製作するようになる。今後は、明治以後の富山町石工の実態の解明を通じ、近世末における富山町石工の動態を再検証する必要があると感じる。

注

- (1) 京田良志氏はこれを「礪石」と呼称している（富山市教育委員会 1983）。
- (2) 『富山藩士由緒書』（新田編 1983）によれば、文化～天保年間に佐久間家は 2 家があり、うち小堀医である親庵が名に「庵」と付けている。もう 1 家は料理人である。
- (3) 富山市島神明社の神通峠産砂岩製狛犬、富山市中沖二上神社の神通峠産砂岩製逆さ狛犬は、台座ではなく基礎文様に波瀬文を用いる。

引用・参考文献

- 尾田武雄 1995 「芹谷山千光寺周辺の石造物中間調査報告」『土蔵』第 8 号 研波郷土資料館蔵
友の会
- 京田良志 1970 『石燈籠新入門』誠文堂新光社
- 高瀬保編 1987 『富山藩侍帳 越中資料集成 1』桂書房
- 富山市教育委員会 1983 『富山市石仏・石塔等分布』
- 新田二郎編 1988 『富山藩士由緒書越中資料集成 1』桂書房
- ねずてつや 1994 『狛犬事始』ナカニシヤ出版
- 古川知明 2011A 「常願寺川石工中川甚衛門について」『富山史壇』第 164 号 越中史壇会
- 古川知明 2011B 「神通川石工とその周辺—近世石工と在地石材—」『大境』第 30 号 富山考古学会

富山市教育委員会埋蔵文化財センター所報

富山市の遺跡物語 第 13 号

平成24（2012）年3月30日発行

編集・発行

富山市教育委員会埋蔵文化財センター

〒930-0091 富山市愛宕町 1-2-24

TEL 076-442-4246 FAX 076-442-5810

URL:<http://homepage2.nifty.com/kitadai/>

（北代繩文広場と兼用）

E-mail:maizoubunka-01@city.toyama.lg.jp

印刷 ブスカラファクトリー